



移築新装なった千葉県護國神社



第141号

特攻隊戦没者
 慰霊顕彰会
 公益財団法人

編集人 金子敬志
 発行人 石井光政
 印刷所 島根印刷株式会社

目次

暑中お見舞い申し上げます	3
理事長就任ご挨拶	2
会員等投稿	
我が人生の総括としての『平和道』	5
多田野語録	7
特攻隊員と暮らした一年半	10
昭和天皇特攻隊に涙をぬぐわせたり	15
陸軍航空特攻隊員の食生活について	17
連載 山ある記19	29
各地慰霊祭参加報告	
旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式	30
戦艦「大和」戦没七十七年追悼式	31
万世特攻慰霊碑第五十一回慰霊祭	32
特別攻撃隊招魂祭・昭和の日記念祭式	35
知覧特攻基地戦没者慰霊祭	36
特攻殉国の碑慰霊祭	37
福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭	38
千葉県護國神社特攻勇士之像慰霊祭	41
顕彰譜(7)	42
芸欄 歌俳柳の広場	
短歌・俳句・川柳	46
事務局からの報告等	
第71回特攻平和観音年次法要について	47
「靖國カレンダー」の斡旋	47
住所等の変更について	47
寄付者等の報告	47

署中お見舞い申し上げます

公益社団法人 隊友会

会長 藤 縄 祐 爾
 理事 折 木 良 一
 常務理事 徳 地 秀 士
 常務理事 河 野 克 俊
 常務理事 齊 藤 治 和
 事務局長 藤 井 貞 文

公益財団法人 偕行社

会長 志 摩 篤
 副会長 深 山 明 敏
 相談役 富 澤 暉
 理事長 森 勉
 副理事長 熊 谷 猛
 専務理事 奥 村 快 也
 事務局長 山 越 孝 雄

公益財団法人 水交会

会長 赤 星 慶 治
 副会長 佐 賀 幾 男
 理事長 杉 本 正 彦
 副理事長 河 野 克 俊
 専務理事 村 川 豊
 事務局長 長 谷 川 洋

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 齊 藤 治 和
 副会長 杉 山 良 行
 副会長 片 山 隆 仁
 副会長 戸 田 眞 一 郎
 副会長 藤 田 信 之
 副会長 谷 井 修 平
 専務理事 小 城 眞 一

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島 村 宜 伸
 理事長 山 下 輝 男
 専務理事 伊 藤 隆
 常務理事 國 澤 輝 生
 東郷神社 宮 司 福 田 勉

東郷会

会長 友 國 八 郎
 副会長兼 田 内 浩
 理事長 伊 藤 和 雄
 編集長 足 立 晴 夫
 事務局長

一般社団法人 日本郷友連盟

会長 寺 島 泰 三
 副会長 森 勉
 専務理事 越 智 通 隆
 常務理事 (兼編集長) 富 田 稔
 (兼事務局長) 理 事 袴 田 忠 夫

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長 藤 田 幸 生
 理事長 岩 崎 茂
 副理事長 岡 部 俊 哉
 専務理事兼 石 井 光 政
 事務局長 白 田 智 子
 理事 鮎 田 英 一

監事

羽 部 軍 喜 也
 阿 部 喜 明
 福 江 広 明
 久 納 雄 二
 大 穂 園 井
 鮎 田 英 一

特攻隊戦没者慰霊顕彰会理事長就任に当って
理事長 岩崎 茂



だ8年も経過しておらず、必ずしも「特攻隊」の事を熟知している訳ではありませんが、藤田理事長の下で副理事長を務めさせて頂き、当会が行う各種行事や活動、そして日本各地で行われております特攻隊の慰霊行事に参加させて頂きました。「特攻隊」について少しずつ勉強して参りました。

当会は、ご承知のとおり、以前は「財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」として活動しておりましたが、平成23年（2011年）1月以降、「公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会」となり、「特攻隊戦没者の慰霊顕彰を行う」ともに、特攻隊の史実等を広く国民に伝える事業を通して、国の恒久平和と発展に寄与すること」を目的として各種活動を行ってきております。

当会の行う慰霊事業としては、毎年3月下旬に主催する靖国神社での「特攻隊全戦没者慰霊祭」、毎年秋分の日、世田谷山観音寺が主催する「特攻平和観音年次法要」への協賛です。また、当会は、他慰霊関連団体が行う慰霊祭等への参列、協力も行っております。当会の他の事業としては、会報「特攻」の発行、特攻隊に関する資料の収集・調査、そして全

「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」の会員の皆様、そして我が会の会報であります「特攻」をご愛読して頂いております方に日ごろからのご理解、ご支援、そして叱咤激励に心から感謝・御礼申し上げます。

この様な厳しい状況の中ですが、当会としては、いろいろな方々のお知恵を借り、会報である「特攻」の編集見直し、ホームページをリニューアルし、ネットを活用した広報の強化を行う等、これまでにない工夫を行うことで、前述の様な会員数の減少の歯止めを一定の効果が出ていると評価しております。また、各都道府県に所在する護国神社への「特攻勇士之像」奉納事業は、奉納により、これまで特攻隊戦没者の慰霊祭が行われていない地域での慰霊祭として定着しつつあり、特攻に対する理解が少しずつ進んでいるのではと考えております。しかし、

私は、去る7月25日の理事会で、藤田幸生理事長の後を受け理事長を拝命致しました岩崎です。私は、防衛大学校を昭和50年（1975年）3月に卒業し、以来、航空自衛官として約40年間近く自衛隊で勤務させて頂き、平成26年（2014年）10月に退官致しました。当会には、自衛隊を退官後に入会しましたので、ま

まだまだ十分ではありません。是非、当会の会員方々に、そして「特攻」の愛読者の方々に、当会の活性化のアイデアをお願いしたいと考えております。

最近の世界の状況を鑑みるに、ウクライナへの軍事侵攻が起り、台湾海峡の危機が叫ばれております。この様な時代だからこそ、我々は、今一度、先人が残された偉業に感謝しつつ、我が国の安寧を願って止みません。

私は、諸先輩のご指導、ご鞭撻のもと、理事長として、率先垂範、皆様の先頭に立ち、当会の発展・繁栄の為、尽力することをお誓い申し上げます、就任の言葉としたいと思います。



今一度、「平和道」を求めて
我が人生の総括としての『平和道』

会長 藤田幸生

1 はじめに

我が生涯のテーマは、「平和道」です。「コロナ禍」の以前から、考えていたことを、「ウクライナ禍」の今、もう一度、考え直してみました。これが、私の最後かも……？

「道」という言葉があります。日本人は、森羅万象 全てのことには、「道」を見出してきました。例えば、茶道、華道、柔道、剣道、武道、香道・・・日常生活において、限りなく「道」を、求めてきたのです。

これは、「日本人の考え方の特性」と、言えるものなのかも知れません。

その延長線上での、「平和道」なのだからです。

それは、「いわゆる反戦平和」でも、「非武装中立」でも、「非核三原則」でも、「武器輸出禁止」でも、「反軍思想」でも、ありません。

「日本人の道」なるものとして、この「平和道」を、追求してみたいと思います。

2 「道」とは

この日本が持っている「道」とは、そもそも一体、どのようなものなのでしょうか？

世界には、数多くの宗教が、存在します。それら宗教は皆、人が生きていくことを助けるものとしてです。

しかし、それら宗教の間には、今なお、「宗派、宗教間の争い」が、絶えません。「人の悩みを解決し、助ける」という、共通の理念を持ちながら……です。確かに、生きる環境や、風土は、異なります。

しかし、同じ人間同志です。どうして、共に、平和を求める事が、出来ないのでしょうか？

「道」とは、

① 「術」では、ありません。 競うルールが、あります。

② 命のやり取りは、ありません。 無駄が、ありません。

③ 「技」の奥に、「精神」があります。「心」があります。

④ その「精神」を鍛えあげて、最終目標にしているのです。

⑤ 「相手」は居るが、「敵」はいないのです。

そのようなところに、「道」は存在する

ように思われるのです。

3 「平和道」

そこで、「平和道」なるものを考えてみました。

① 固定概念で、硬直した考え方にしない。

② 「道」をネットワークにして、人も国も、相互に交流して理解を深めていく。

③ 「武」を大切に。「武」とは、「戈」を「止める」原点です。

④ 「武道」は、すべからず「礼」に始まり「礼」に終わります。相手を尊敬します。

⑤ 「平和」は、自ら構築するものです。それには、多大な努力と、犠牲さえも必要です！

⑥ 各国は、それぞれに、あらゆる分野で、有事に備えた体制をとっておく必要があります。「質実剛健」、「質素儉約」、「謙虚さの奨励」、「尚武の精神」……！

⑦ 武人は、装備、防具を選び、それを使いこなす技能を磨きます。訓練、演習の場で、その実力を発揮して、その力を内外にします。また、「常在戦場」の気を養いつつ、毅然として生を営んでいきます。

⑧ 各国政府は、『不戦』の誓いを立てつつも、法的、物的、精神的な「即応

体制」を、整備、維持するのです。それは、日々、「日本刀」を手入れする精神に通じています。

4 「道」を求めた先人達

日本は、「江戸」から「明治」にかけて、「封建時代」から、「近代」に移りました。

この時、武人たちは、剣術、柔術等の「術」を「道」に変えました。そうして、それらを、「肉体の鍛錬と精神の修養の場」として、子孫に残してくれました。

これは要するに、『実用する「術」を通じて、その精神たる命のやりとりを前提としない「道」を知ること』と、されたのです。これが、「武術」と「武道」の違いです。

禅の道を極められた先人達が言われた「海上武人」の言葉の意味するところは、将に、ここにあったのではないでしょうか？

「道」とは、漢和辞典によれば

一 ① 人が守り行うべき正しい道理、人道

② 儒教のいう仁義、徳行

③ 宇宙の根源

④ はたらき、方法、やり方

⑤ 教え、教説

⑥ したがう、ついて行く

二 ① 説く、みちびく

② てびき、あんない

③ 教える

という意味を含んでいるそうです。

私が、「平和道」に期待する所以は、ここにあるのです。

5 「我が道」を求めて

防衛大学校では、建学当時、「任重く道遠し」と、教わりました。

吉田茂：小泉信三：榎智雄（初代校長）に流れる考え方です。

これは、防衛大学校では、「榎イズム」と言われて、その著書「防衛の務め」等に伝えられています。例えば、

『自主自律！』

『良き武人である前に、よき市民たれ！』

『武人が、ちやほやされる時代は、良い時代ではない。』

『厳しい道ではあるが、覚悟して歩め！』

『教養を高め、広い視野を保て！』

『疑義無き服従心を、保て！』

『仮に、日本が平和道なる道を求め得て、その道を歩んで行くとすれば、それは、リスクの大きい、険しい道になる』と、

教えられたのです。

「そこでは、危険が伴い、誇りを傷つけられ、忍耐を強いられましょう！それでも尚、私達日本人は、毅然として、愚直

なまでに、戦を避け、平和を求め、その道を歩んでいくと、言うのであれば、この『覚悟』が必要である」との、教えでした。

私は、納得し、自分なりに、愚直に、その道を歩んで来た積りです。

6 御製に、求めて

日本は、世界の国々で、一番古く、古来、「皇室」を頂いて、国を営んできています。

そうして、その時々を読まれた「御製」に、その精神は、表現されています。

例えば、いくつかを示すと、以下の通りです。

『よきをとり あしきをすてて外国（とつくに）に おとらぬ国となすよしもがな』

『よもの海 みなはらからと思ふ世に だつ風（た）ちさわぐらむ』

『しきしまの 大和心のを、しきは ことある時ぞ あらはれにける』

『わが國は 神のすゑなり 神まつる昔の手ぶり 忘るなよゆめ』

『目に見えぬ 神にむかひてはぢぎるは、人の心の まことなりけり』

『再度の「平和道」』

このように考えていくと、だんだん、このような『道』が、あっても良いので

はないかと思えてきます。平和を作り、維持する「道」を、皆でそれぞれに、考へ、構築していききたいと思えてくるのです。

例えば、富士山への登山の話がありません。頂上の「お鉢」：：そこが、目指す「世界平和の場所」だとすれば、その頂上に至る登山道の入り口は、御殿場口、吉田口、須走口等、東西南北から、数多くの道があります。

目指す目的地の頂上『平和』は一つですが、「そこに至る道」は、沢山あります。

『平和』への道：：理想実現への手段：：は、それぞれに、「沢山ある」と、いうことは：：！

8 まとめ

「国家利益」が、各個に、声高に、唱えられています。

そして、「個人の権利・利益・自由追求」が、生き物、人間の本能として認められています。

このように、「自由放縦な生存競争」を前提にしていると、「戦争」は、無くなりません。

しかしその中で、「武士道」「騎士道」「宗教」などは、人類として、また異なる価値観を形造っているようです。さらにまた、「戦国時代」を経てきた人類は、

多くの犠牲と知恵を出して、それを乗り越えてきました。

従って、私達の社会は皆、その争いを乗り越える方法、手段を、経験値として保有していると思えるのです。

しかし、その実行には、不便と犠牲を生じる覚悟が要るでしょう。

平和実現には、苦難を覚悟して、我慢して、乗り越えるだけの知恵と体力、忍耐と精神力、強靱さも必要になると思われます。何よりも、「強い和の精神」が、：：！

それでも尚、私達は、永遠の課題として「平和道」を、追求していかなければならないと、思えてくるのです。

私達日本人は、「和」の心をもって、あらゆるものを、「道」にして前進していく感性を持っています。だからこそ、この苦難をも、乗り越えて行けるのではないのでしょうか？

「和」の心と、「真勇」と「知恵」：

・「大和(だいわ)」：：を、もって、人類の先頭に立って、「この道」を、歩んでいきたいものです。人類の「フアー・スト・ペンギン」のように：：です。

(以上)

多田野語録

「山上、山また山」

会員 多田野 弘

今月のテーマ「山上、山また山」とは、何を意味しているのだろうか。頭に浮かんだのは、徳川家康が残した「人の一生は、重荷を負うて遠き道をゆくが如し、急ぐべからず」の名言である。私たちの一生も、越えねばならない山に幾度も遭遇する。苦難や障壁となる山こそ、人の進歩成長には欠かせないものだ、という意味ではないか。

私たちは、思いもよらぬ不幸な出来事や苦難に遭えば、「どうして私だけが」と運命を呪うだろう。だが、病氣・怪我・失敗などの不運を嘆くよりも、平然と受け入れ、冷静に対処した方がどれだけ賢明かしかない。オーストリアの動物学者コンラット・ローレンツは、「幼い時に苦難に遭わなかったのは不幸せだ」と述べている。日本の諺にも「若い時の苦労は買うてでもせよ」がある。

普通、運命は決まりきった、生涯動かすことのできないもののように考えがちである。しかし、運命をどう受け止めるか、その態度と処し方によってどのようにも変えられる。運命は天の配剤であるとともに、人間がつくっていくものである。

る。イタリアの政治思想家マキャベリは、「運命は我々の行為を半分支配し、他の半分は我々自身に委ねる」と述べている。つまり、運命はどうにもならないものではなく、私たちの自らが限りなく変化させ、創造し得るものと考えている。

もし運命が宿命のように変えられないものならば、私たちは運命に操られるロボットと少しも違わないことになる。そこには自由もなく、主体性も創造性も必要ない。しかし、私たちの絶えざる学びと実践によって、日々新しくする創造の生活をするならば、運命がどのように変化していくかは計り知れない。

運命はその素材を与えるだけで、それを私たちの責任においてプラスにもマイナスにもできる。運命より強いのは人間の精神である。オーストリアの精神心理学者、V・Eフランクは、アウシュビッツの収容所の体験を通して、「人間はいかなる過酷な拘束を受けようとも、精神の自由は少しも損じない。囚人の内で、希望を持ち続けた者のみが多く生き残った」と語っている。何かが起こったときの私たちの対応の仕方、全く違ったものになる。いいことばかり起きる人生など、どこにも存在しないという運命の全てを受け容れるのである。

それは無力なための諦めでも、戦いの

放棄でもない。苦しくとも運命を受け容れ、自分にとつて必要だったことのように従うのである。フランスの哲学者ベルグソンは「人間というものは、自分の運命は自分でつくっていきけるものだということ、なかなかな悟らない」と述べている。哲学者西田幾多郎も、「人間は環境によって変えられるが、また環境は人間がつくっていくものだ」と断言している。私はかつて南の戦場で、逃れられない死の運命を、進んで受け入れた瞬間、全てから解放された自由と、計り知れない大きな精神的支柱を得られた。

運命に叩かれ鍛えられ、苦しむことがなかったら、私の人生は形成できなかつたのは確かである。青年期に過ぎた戦場で、必死が予測された運命を何度受け入れ、その都度不思議にも生きていた。神はまだ役に立つ、今捨てるのは勿体ないと生かしてくれたに違いない。こうして得た生死一如の体験によって、運命をどう受け容れればよいかを身につけることができた。当然、戦後その恩に報いるのが私の生きる目的になっている。あの辛い惨めな思いは二度と味わいたくないが、運命とはそういう選択不可能な出来事である。好ましくない運命、避けたいと思う運命ほど、貴重な教訓を含んでおり、反対に好ましい運命には、得

るよりも失うものが多いことを知った。たとえ不運であっても、わが身に起こるすべての出来事には必ず貴重な意味が含まれている。自分に必要だから与えられたのだと受け取れば、人間として大きく成長できるのではないか。

私は運命には、無意味なもの、無価値なものは何一つないと確信している。挫折も失敗も、病気も、プラスにしようと思えばできる。それには、いかに過酷な理不尽な運命に遭つても、自分が学ぶ種は必ず見つかると思えることである。人生における苦難こそ、私たちの進歩成長を願う大自然の配慮であり、神の贈り物と受け止めたい。101歳を迎えた今、「山上、山また山」を歩み続け、命を使い切りたい。

多田野語録 「挑戦と創造」

会員 多田野 弘

今回の表題「挑戦と創造」は、私の人生を象徴しているように思えてならない。「挑戦」とは、ものごとに積極的に働きかけ戦いに挑むことをいい、「創造」とは、これまでにない新しい考えや物をつくり出すことをいう。私が挑んだのは、自分の可能性である。その挑戦で得た気づきが、私の人生を創造していった。

目標に挑戦する人は多いが、自分に挑む人はあまりいない。自分が思いどおりにならないのが分かつているからだろう。にもかかわらず、私が自分の可能性に絶えず挑戦し続けたのは、戦場で魂の存在を知ったことによる。以来、不思議にも烈しい弾雨の中を平気で行き来できるようになった。さらに凄いのは、死は忌まわしいことではなく、祖国に殉ずる尊いものだと価値観が一変したのである。

3年間、南方の最前線で毎日、生死の境を彷徨して過ごし、101歳の今もなお挑戦を止めないでいる。例を挙げると、93歳まで49年間、元日の海での寒中水泳を続けたのもそのひとつである。今でも

我ながらよくやったと褒めてやりたい。なぜそのような馬鹿げたことをと思われるだろうが、これはやり終えた者にしか分からない。自分を統御・支配できた克己の喜びがあり、乗り越えた時の歓喜を知ったからだ。

戦後の自己への挑戦と創造は、今日のわが社の成長に大きく寄与している。親子3人で始めた零細企業が、製品の半数を輸出し得る、世界企業にまで発展できたのである。その起点は、現在の主力製品である油圧トラッククレーンを、日本で最初につくりあげたことである。だが、どうしてそのような発想が生まれたのか。

要因の一つは、私の海軍で培った、航空機整備に付随した僅かな油圧の技術に基に、無謀にも試作機づくりに挑戦したことにある。数か月かけて、限らない試行錯誤と失敗を繰り返しながら、辛うじて完成させた。その幼稚だった試作機を、今まで見たことがない便利な省力機械だと、荷役・建設業界が注目するのに時間は要らなかった。燎原の火の如く需要が広まったことが、今日につながる成果を齎したといえる。今もお、社員の創造性は止むことがなく、進歩成長を続けている。

話を元に戻す。最近、自己への挑戦意欲をさらに湧かす本に出会った。世界のベストセラーとなった、E・キューブラ・ロスの書「死、それは成長の最終段階」である。この表題を見るや、挑戦の意欲が湧いてくるのを覚えた。そこには、「私たちの死に対する一般的概念の中に成長の見込みは含まれていないが、人間を成長に導くのは人生の他のいかなる力よりも、死が迫りつつあることと、死までの過程を経験することである」と述べられている。

私たちは食べて、寝て、働くだけでなく、それ以上の人生を送りたいと望んでいる。それは、成長すること、より人間的な本当の人間になることである。私は

キューブラ・ロスの言葉にふれ、自分の人生に照らし合わせみて自信を深めた。近年感じていたことを、ざばり現わしてくれていた。私は幸いにも、戦場で死までの過程を幾度も経験した中で、誰もが容易に悟ることが難しい魂の存在を知ることができた。それが今も私の人間的成長を促してくれている。

80歳から始めたこの語録も、今日まで22年間、毎月自らを振り返りながら綴ってきた。人生の最終段階にある今こそ、人間的に成長する機会であると、意欲を燃やしている。私の好きな諺に、熊沢蕃山の「憂きことのおこの上に積もれかし、限りある身の力為さん」がある。残された人生は、さらなる挑戦と新しい自分を創造する絶好のチャンスであると考えている。

多田野語録
「魂」

会員 多田野 弘

魂については、これまで語録の中で断片的に述べてきたが、いずれも私自身が満足できる内容ではなかった。なぜなら、そもそも魂は、理性で知ることができないもので、言葉で説明するには無理がある。まして素養がない私には容易なことではない。

しかし、いかに難しかろうと、魂の存在を述べずにはいられない。誰もが納得できるように、分かり易く語り続ける必要がある。青年期に目覚めた魂の存在によって、私の悔いのない、自負する人生がつくられたからである。100歳を超えた今もお、矍鑠として人生を謳歌しており、如何に魂の影響が大きいかを知ることができる。

魂という言葉は、誰もがよく耳にして、多くの書にも散見される。魂を冷やす、魂を入れ替える、大和魂などの言葉を通じて、暗黙の裡に魂の存在を知っている。しかし、魂とはどういうものかを明確に知る人は少ない。なぜなら、魂は理性で知ることができないだけでなく、もともと、天来のものであるからだ。私の僅かな体験からみても、魂の存在を知る一番の近道は、自分自身を深く見詰めて気づくことだといえる。それは理性によって知るのではなく、直観でその存在に気づくのである。私は、死を目前にした時が、自分を見つめる最大の機会だった。魂の存在に気づいたのは、正にその時だった。しかし、死の直前に魂の存在に気づいても、その素晴らしきものとに生きる時間がないのでは、勿体ない。魂に目覚める機会是他にもある。例えば、取り返しのない失敗をして、挫折感

に落ち込んでいる時、何もかも行き詰って前途を絶望し、瀬戸際に立つ時などが、真剣に自分を見つめる絶好の機会となる。自分を見つめるとは、自分を見るもう

一人の存在が有ることを意味する。それが魂の働きであり、自分を咎めることができる良心でもある。「魂とは、肉体に宿り、心と身体を支配し、統御する」ともいわれる。心と身体、すなわち命を自分の思うように統御できるのが魂である。かつて戦地で、自分に死が迫った時、潔く一命を捨てる決意をさせた魂の偉大な力を認めずにはいられない。しかし、何故魂にそのような力があるのか。

私たちの命は、他の動物・植物と同様に、大自然の摂理・宇宙の意志（神・大いなるものともいう）によって、この世に生を与えられた生き物の一つである。従って、命に含まれている魂は、宇宙の持つ生成発展の意志を帯び、命を捨てさせるほどの力を持っている。同時に、私たちの良心となり、自然治癒力となって

身体を護ってくれている。身の危険を予知し、ひらめきや直感を鋭くし、天啓を聞き取り、すぐ勘やコツを覚えられるなどは、理性・心ではなく、魂の働きである。私の考える魂の一端を、お伝えできれば幸いである。

『特攻隊員と暮らした一年半』短冊に記された辞世の思いを伝えたい』

評議員 宮本 雅史

五歳の頃、出撃を控えた特攻隊員と生活を共に過ごした三重県伊勢市の岡出とよ子さんに特攻隊員への思いを伺いました。

七十七年経った今も、その日の朝のことは鮮明に覚えている。両親らと整列をして見送っていた。一人の兵隊さんが、突然振り返り、引き返してくると、両肩をわしづかみにした。兵隊さんの手に力が入り、ぐぐつと抱きしめると、耳元でささやいた。

「とよ子ちゃん、行ってくるよ」
その声は今も耳に焼きついていて。五歳だった。

「私は『ハイッ』と答えたのだと思いますが、兵隊さんの力が強くて、今でも両肩をわしづかみにされた時の痛みを覚えています。今、思うと、あの時、特攻出撃する兵隊さんに何かを託されたような気がします」

特攻隊員は出撃前、辞世を記した短冊をとよ子さんの両親に託していた。今、とよ子さんの手元には三十四通の短冊が残されている。とよ子さんはこの辞世を

前に、「私には兵隊さんから託されたものがある。今の若い人に伝えるお役目がある」と力をこめる。

◇ ◇ ◇

B 29の来襲が始まった昭和十九年六月、明野陸軍飛行学校（三重県伊勢市）は、明野教導飛行師団に改変、二十年に入ると特攻隊が編成され、一月には五隊、三月には十六隊、四月以降には一隊の計二十二隊（一隊六〜十二人）が鹿児島県・知覧飛行場などから沖縄西方海上に向け出撃した。

伊勢市川崎町の魚市場で理事長をしていたとよ子さんの父、喜作さん（当時三十八歳）は、十八年頃、伊勢市新道の飲食店街にある旅館を一軒買い取り、明野陸軍飛行学校御用達の宿泊施設「攻空寮」



とよ子さんの父 喜作さん

を始めた。鹿児島県・知覧町の「富屋旅館」や、加世田町の「飛龍荘」と同じように、「攻空寮」も特攻隊員が出撃前、最後の時間を過ごす場所になった。

寮は外宮から歩いて、十五分ぐらいのところにあつた。木造の二階建てで、二階が特攻隊員の“住居”。板前が二、三人いて、女中が四、五人いた。

「父がどういう縁で攻空寮を始めたのか、何も話してくれませんでしたので分かりません。でも、母や当時の女中さんらの話を聞くと、父は背が低いという理由で兵隊になれなかったようで、そのことを大変悔いていたみたいです。『（背丈が）

デパートで売っているものなら、買って背を足したい（身長を伸ばしたい）』と悔しがっていたと母から聞いたことがあります。日本人として、何かの形で国のお役に立ちたい、兵隊さんのために何かをしたいという気持ちが強かったようです」

とよ子さんは当時三歳で、記憶は薄いが、特攻隊が編成され、特攻隊員が出撃前に宿泊するようになった昭和二十年代は四歳から五歳。一緒に暮らした特攻隊員の姿をかすかだが覚えている。

「周りにはいつも兵隊さんがいました。後に兵隊さんは出撃を控えた特攻隊員だっ

たと知りました。皆さん、特攻出撃する寸前になつてうちの寮に泊まれたんです。私は昭和十五年五月二十四日生まれますから、兵隊さんたちが最後に特攻出撃して行かれたのと、私の五歳の誕生日が一緒ぐらいじゃないでしょうか」

当時の話になると、記憶がよみがえってくるのか、エピソードがどんどん口を突いて出てくる。

「夕方、軍靴の音がコツコツと響いてくると、女中さんたちは電柱に耳を当てて、音を聞いていました。『兵隊さん、お帰り』といつて忙しくなりました」

「兵隊さんたちと空襲警報発令の稽古をしました。兵隊さんたちが『空襲警報発令！』と大きな声で叫ぶのです。私と二歳年下の妹は大きな声で『は〜い』と応えて、耳を押さえて目をつぶって、廊下につぶせになるんです。そんな稽古をしながら遊んでもらいました」

「まあ、賑やかでした。私は四歳から五歳だっと思えますが、もうすぐ亡くなる兵隊さんとは思わず、一緒に騒いでいました。毎日、賑やかで、賑やかで。二階から、『わ〜』と笑ったかと思うと、手を叩いたりする音が聞こえました。さわぎ声だけが今も耳に残っています。ところが、兵隊さんたちは次の朝になると、

とよ子さんは当時三歳で、記憶は薄いが、特攻隊が編成され、特攻隊員が出撃前に宿泊するようになった昭和二十年代は四歳から五歳。一緒に暮らした特攻隊員の姿をかすかだが覚えている。

明野（明野陸軍飛行学校）に戻っていくのです。戦後、生きて帰って来られた兵隊さんに聞いたのですが、皆さん、明野から鹿児島知覧飛行場まで飛んで、特攻出撃しようです。中には、宇治山田駅や伊勢市駅から客車に乗って大阪まで出て、どこかで合流した人もいたみたいですよ」

「うちから外宮までは二十分もかからなかったのに、皆さん、外宮にお参りしてから戦地に向かったようですよ。中には、身も心もすべて捧げると、有り金をすべて神社に寄付した兵隊さんもいたと聞きました」

「兵隊さんたちは、夜はどんちゃん騒ぎをして、次の朝、整列して出て行くのですが、両親も板前さんも女中さんも、みんな、気をつけをして『行ってらっしゃいませ』と見送りました。人数は覚えていませんが、今日は二人、明日は三人という感じだったと思います。一泊で出撃した人もいました。毎晩、入れ代わり立ち代わりどんちゃん騒ぎしていました」

「一見賑やかに振舞っていた「兵隊さんたち」も、さまざまな思いを持っていたのだろう。」

「大人になつてから従弟に聞いたのですが、兵隊さんがいる二階に上がって、こっそり部屋を覗いたら、床の間を背に、ぐるりとしめ飾りをして、兵隊さんが軍刀を立て座っていたんです。身体が小刻みに震えているように見えたので、従弟は死ぬのかと感じて、びっくりして下に降りたと話していました」

宿泊する特攻隊員の数は増え、攻空寮だけでは狭くなり、隣の歯科医の自宅が寮の“離れ”になった。

「歯医者さんの家は寝るだけで、食事はうちの寮で食べました。大人になつてから、近所の人から、とよちゃんが『ご飯できましたよ』って呼びに来るよって話していると、あなたは大きな下駄をはいて、裏口から『兵隊さん、ご飯できましたよ』って呼びに来るんです。兵隊さんたちはそんなあなたをかまわなくて、面白がってたわよと、聞かされました」

とよ子さんは、出撃を間近に控えた特攻隊員の“アイドル”だったのかもしれない。

喜作さんは、「最高の料理を食べて貰って喜んでもらうんだ」と、タイやアワビの刺身などを出していたという。

「父は借金をしてでも食材を買い集めたようですよ。母が、小学校の同級生の親が

経営する風呂屋に行つて「お金を貸して」と借金をしようとしたら、おじさんが、何も言わず、番台の箱を持たせてくれたと話していました。魚を仕入れるお金だったそうです」

喜作さんの特攻隊員への気遣いは随所にみられる。

「戦後、女中さんの一人が、父に『兵隊さんは、この家を出たら、二度と家庭の敷居はまたげないのだから、敷居だけは一生懸命、きれいにするように。部屋の掃除は後でいい』と言われたと、当時の思い出して話してくれました」

「女中さんや板前さんらは『この家での兵隊さんのことはだれにも言うてはいけない。堅く口止めされていたので、一生、だれにも話さないで墓場まで持つて行く』と話していました」

「私は兵隊さんがお酒を飲んでる部屋には入れなかったから、直接、お酒を飲んでる姿は見たことはないです。父も酒飲みでしたから、父に「お父さんも一緒に飲んで兵隊さんとお酒を飲んでつたんやろな」と言ったら、『それはない。そんなことができる時代ではなかった』と叱られました」

喜作さんとはじつくりと話したことはないという。それが後悔だとも。「五十

三歳で亡くなったんですよ。戦後は田舎の黒瀬町に戻り、市会議員をやったり、農協の組合長をやったりで、活動的だったから、話をする時間がありませんでした。これも女中さんに聞いたのですが、父は、残った刺身なんかを兵隊さんに行っている近所の家を一軒ずつ回り、配っていたみたいです。それほど、兵隊さんをお大切に思っていたようです」

記憶がよみがえってくるのだろうか。「終戦時、こんなことがありました」と言葉をつないだ。

「2人の兵隊さんのことをよく覚えていません。1人は満州から来ていて、もう1人は彼の部下で九州出身でした。二人とも出撃する予定でしたが、飛ばなくなり、うちの寮で、私たちと一緒に終戦を迎えました。でも、アメリカ兵が人狩りに来ると言って、兵隊さんたちは水杯をして富士山の裾野に逃げました。うちの父も叔父らも一緒に水杯をしていました。しばらくして、寮に戻ってきましたが、満州出身の兵隊さんは、父に『おじさん、僕、帰るところがありません』と話したそうです。この人は高知県出身で、戦前、お父さんと一緒に満州に渡り、戦争が始まると志願して明野で訓練を受け、特攻隊になったらしいです。うちに残り、戦後、近所の女性と結婚しました。部下の

兵隊さんも一緒にうちに住むようになりました」

ロシアに侵攻されたウクライナの四十七歳の男性が、家族を疎開させて自分は兵隊に行くというシーンをニュースでみて、涙が止まらなかつたという。特攻隊の兵隊さんと姿が重なった。

「兵隊さんらは、自分たちは出撃するからと、私に何か、植え付けて行ったものがあると思う」と言葉が力強い。

◇ ◇ ◇

現在、八十二歳。五十歳を過ぎたころから、兵隊さんたちは私に何を残していったんだろうと考え始め、私にできることは何としてもやらなければいけない、と言いつ聞かせてきたという。

母、いせさんは、当時三十二、三歳だった。

「母は、警報が発令されたとき、居合させた兵隊さんが妊娠していた母をリヤ



とよ子さんの母 いせさん

カーに乗せて、徳川山のすそ野まで逃げた話もよくしていました。母は出産前でも走れませんでしたから。その後、妹が生まれませんでした」

「母は、戦後、〇〇さんや××さんはどうしているかな…とよく話していました。母は六十四歳で亡くなりましたが、『風か柳か 貫太郎月かく』と貫太郎月夜を歌っていました。特攻隊の兵隊さんたちがよく歌っていたようです。母は歌いながら、兵隊さんたちを思い出していたのだと思います。母が戦後、当時働いていた女中さんたちとお酒に酔った兵隊さんたちが、貫太郎月夜を歌いながら、階段からころげ落ちたわねえ…などと話していたのをよく聞きました」

学生時代、兵隊さんたちが辞世を記した短冊が、白い布に包まれて、いせさんのタンスに入っているのを見つけた。兵隊さんたちは、喜作さんに辞世の短冊を託して出撃して行ったのだった。

攻空寮に泊ったことがあり、戦後も付き合いのあった元特攻隊員に話すと、明野の航空記念館に収めようということになった。とよ子さんは記念館に寄贈されたと思っていたところ、この元特攻隊員の死後、彼の自宅に保管されていたのが見つかった。「記念館に預けるのが忍び

なく、自分で保管していたようです。それで再び私の手元に戻ってきたのです」
 短冊が手元に戻ってきたことで人生が変わった。

「私の手元に戻って来たということは、私に短冊を遺族に渡して欲しいということだととっさに感じました」

岡出さんはそう言いながら短冊を並べたが、一つ一つの辞世から、特攻隊員の気持ちに心染みつき、見つめられているような気がする。

それから、遺族探しを始めた。五十歳代だった。短冊は全部で三十四通以上あった。初めのころは、出会うと手渡していった。

形見がなく、辞世だけが形見になった遺族もいた。中には、「自分の所に連れて(持って)帰っても、時代が変わり、

いつまでも大切にできるかどうか心配。ほかの特攻隊員の方々と一緒にどこかに預かって貰いたい」とつらそうに話す遺族もいた。人違いをし、謝りながら差し替えたこともあった。

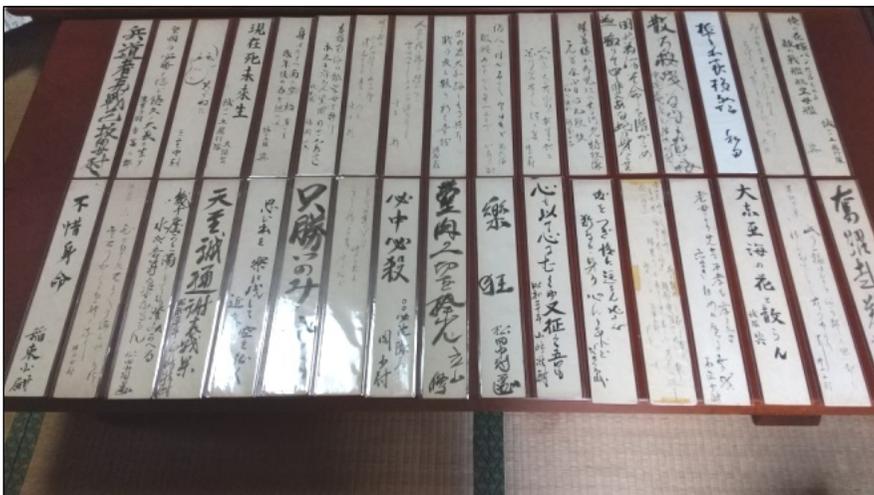
出撃し、生還した元特攻隊員が二人いた。一人は数年前、とよ子さんを訪ねて来たが、短冊を見ると、「今まで生きてきてつらかった。短冊はほかの隊員の短冊と一緒に預かって下さい」今、手元にあるのは三十四通。

とよ子さんは、特攻隊員の思いが詰まった短冊を沖繩縣護國神社に奉納する。

「これからは、今の若い人、特に学生に、学徒動員した“兵隊さん”の思いを伝えていきたい、それが、私のお役目。まだまだ、健康でいないと」と、表情は明るい。



岡出とよ子さん



三十四通の短冊

元侍従武官日記の新聞記事より
昭和天皇 特攻隊に涙をぬぐわせたり

会員 水町博勝

令和四年五月二十七日の読売新聞に元侍従武官の坪島文雄少将（後に中将）の日記が国立国会図書館憲政資料室（東京都千代田区）で一般公開される。との記事であります。

戦後の国力を憂いたり、特攻隊のニュース映画に涙されたり、戦況の悪化に苦悩する天皇陛下の姿を伝える内容で、専門家は「そばにいたからこそ知り得た切実な心境が書き連ねている貴重な資料」と話しています。

武官の在任は、昭和十六年九月一日（昭和二十年四月一日（最終階級陸軍中将））大日本帝国憲法下において天皇は大元帥



侍従武官 坪島文雄陸軍少将

の地位に鑑みて、侍従武官は、常に天皇のそばにいて、侍従武官長のもと、軍事に関する奏上、命令の伝達など天皇と軍との連絡役を担って、陸海軍の演習や軍事視察の際は天皇に随行し、又天皇の代理として派遣されました。

寄贈されました。武官長の蓮沼蕃陸軍中将の下で、武官長に次ぐ立場にあつて戦争関連の重要な情報が得やすかつたのでしよう。

昭和十八年一月三日の日記にはニューギニアなど南方の戦いについて昭和天皇は「一部ノ敵ト思ヒ居ル内何時ノ間ニカ敵ノ有力部隊進出シ、或ハ又敵ノ新飛行場等出来ルコトアリ、油断ナキ様注意セシムヘシ」と警戒を怠らないよう述べられ、ミッドウェイ海戦・ソロモン南太平洋海戦の後の米軍の動向についての注意喚起をされていきました。



日記「サービスの参考」

同年二月三日の日記には、前月末兵士に配られた食料を熱心に見た陛下は「熱帯地ニ於ケル保存性ハ如何ナルヤ」厳しい戦場での将兵の食料にも気を配られていきました。

同年三月二十七日参謀次長の戦況報告に対し天皇は「頑張り通セハ何トカナルト言ウカ如ク聞ユル。勿論頑張ルコトニ不同意ハ無イカ、国ヲ最後ノドタンバ迄追込ムコトハ、戦後ノ国力回復ヲ困難ニスヘシ」と戦局の不利と戦後を憂える様子が記されています。これを受けた坪島武官は「戦争ノ終末ヲ如何ニスヘキヤニ付御心配アラセラレル、畏キ極ミナリ」と敬服されておられました。

特別攻撃隊の作戦は、昭和十九年十月二十五日隊長関大尉がマバラカットから神風特別攻撃隊が出撃、翌日及川軍令部総長は比島の戦鬪経過について奏上、陛下は「ソノ様ニ迄セネバナラナカタノカ・然シ良クヤッタ」と軍部が伏していた作戦・特攻作戦を初めて承知された。その後比島作戦は撤退・硫黄島は占拠され本土決戦の作戦が開始される頃、昭和二十年三月七日の日記には、特攻隊のニュース映画を見た時の様子について、特攻隊員らが寄せ書きをする場面に「聖上御涙ヲヌグワセラレタリ」と涙する昭和天皇の姿が記されていました。

昭和天皇実録、昭和天皇独白録にみる歴史家の資料とは違って、真近くで居られた侍従武官しか知り得ない記述です。この記述を見て想い出されたのが世田谷山観音寺の特攻観音堂内の「厨子と金箔の蓮の花」です。

賢照大和尚様から伺っていました。観音堂内に新たに特攻平和観音像を納める厨子が造られた際、正面の扉に菊の御紋章を飾ることを宮内庁に申し出て、特攻様に付けずして付ける所が何処にありません。と承諾を得ました。

又この厨子の両脇に「金の蓮の花」が飾られています。これは昭和三十七年五

月五日、特攻平和観音像の開眼十周年目に当たって、畏れ多くも昭和天皇・香淳皇后両陛下から賜った御下賜金を基にして作られたものです。

昭和天皇陛下が特攻隊のニュース映画に涙するお姿並びに特攻隊員を慰霊する特攻平和観音像への哀悼の御気持ちは、国の為に命を捧げた特攻隊員への想いを強く感じた次第です。

この日記の内容がご遺族或は各地の特攻隊員の慰霊祭に参加される方に通じるものがあれば幸いです。



厨子と金箔の蓮の花

陸軍航空特攻隊員の食生活について

会 員 大 槻 健 二

はじめに

昨今のメディア等における誇張された情報は、知らない視聴者が誤解をもつて受け止めている部分もある。当時を知る人が年々減少していく中、令和四年一月末にはNHKでドラマ化して放送された『特攻兵の幸福食堂』という漫画など、様々な試みにより物語として伝える事は記憶の風化を防ぐ中で意義あることかもしれない。しかしこれと並行して事実関係を精査し、正確な情報を残すことも課題となってくるだろう。

靖国神社の敷地内には鳥浜とめさんの玉子丼を再現して出す店がある。知覧に集結した振武隊の全てに当てはまるものではないが、インターネット上での投稿を見ると、現代人の特攻隊の食事のシンボルとなっているように感じた。特攻隊の豊富な食事から地上部隊へ目を転じると、戦地における飢餓の話は枚挙にいとまがなく、一杯の白飯、一碗の味噌汁を夢に見ながらも餓えと病魔によって斃れ、帰国の叶わなかった将兵は特攻戦没者の比較にならないほど多い事は目を背けてはならない事実である。ともあれ、今も昔も人間と食物には深いつながりがあり、

調理した者、食べた者、百人百様の思いがあるものである。先人の食事を知ることで一食一食に対する感謝の気持ちが生まれるきっかけとなれば幸いである。

●本稿は特攻隊員の「食」をテーマとし、次の区分に分けて述べることにする。

ア・平素の給養

イ・前線における食事

ウ・出撃直前の食事

エ・出陣用特別食

オ・機内携行食

本文に入る前に、前提として一般空中勤務者の食事がどのようなものであったか紹介する。

宇都宮飛行学校での給養の一例

航空機搭乗員に対する糧食給与などは地上勤務の高級将校までもがとうもろこし、粟、さつまいも等を混入した麦主体の飯を食べていたのですが、同じ食卓で食べていながら空中勤務者は白米の飯に肉、魚、卵、牛乳等は毎食支給され、操縦者は航空で気圧の低い所へ行くと腸内のガスが膨張して腹部不快を起すのを防止するため、雑穀を避けて消化の良い純米の飯を支給されていました。さらに体力を維持するため動物性の肉や魚の脂肪分は毎食支給されていました。学徒出陣の操縦学生まで食事はほぼ同様でした。

『平和の礎 一七』

◎特攻隊員の全てが飽食していたとは限らないが、学生を含めた空中勤務者に対しては下士官であっても地上勤務の一般将校以上の食事を供されていた中で、特攻は格段に優遇されていた様な記述が多数ある。飛行第一〇三戦隊附軍医として知覧に在った尾谷一良氏は、「胃腸障碍は、過食、過飲等に因る物で、特に作戦中が多くあり、知覧に特攻戦、たむわ酣の頃、航空総軍より慰問に來られた高級軍医部に「特攻隊員に何か薬品、その他で必要の物があればというように」といわれ、「別に必要と思うものもないが、出来れば、健胃散を大量に」と申して呆れられた」（『第百飛行団の軌跡』）というエピソードにも、彼等の食生活を想像する事ができる。

以下、事例を列挙していくことにする。

(ア) 平素の食事

※ここでは後方飛行場の回想も含み特攻隊員の待遇についての例を挙げる。なお熱量の単位に「キロ」が抜けている文章には追加してある。（参考までに、白米一合は五三四キロカロリーである。）

第一航空軍の特攻隊員に対する給養の施策

二、給食給養

(1)と号部隊ノ給養ハ一般空中勤務者特別糧食ノ外左ノ現品

小麦粉、食油、獣肉缶詰、甘味品、果
実缶詰、カルピス、日本酒、ウイスキー、
サイダー、煙草
ヲ師団地区司令部ニ交付シ地区内担任と
号給食人員ニ応シ之カ補給ノ遅速ヲ期ス
ルト共ニ臨機ノ給養ヲモ容易ニ実施シ得
ル如クナシアリ

『と号隊員の身上、給与、衛生ノ現況』
と号二二〇飛行隊員の回想

特攻隊員になると、その日から、食事が三、八〇〇(キロ)カロリーの給与となる。航空糧食、甘味品も十分で、余分を整備兵に分けては喜ばれたものである。

『青春の墓標』丹羽仁氏寄稿
第二三振武隊 宇都宮飛行学校壬生分遣隊
隊栄養士の回想

「至急来るように」との本部長からの電話、「今日から陸軍特別攻撃隊の訓練基地となった。隊員の毎日の食事には格別の配慮を」との命令。物資不足の折にもかかわらず各方面から「生き神様」と魚肉や果物が届いた。(中略)私は早速特攻隊員の兵舎を訪れ、嗜好調査をしてできる限り希望に添うよう献立作りを心掛けた。

『孫たちへの証言10』

部隊教育主任「隼若桜隊」(第一一振武隊)編成当初の回想(北京・南苑飛行場)

若桜隊の訓練は当初南苑飛行場で特別訓練を行う事になり、特に健康管理には注意し食事は北京より、京都で長年板前をやっていた調理師を専属につけ、特別食を出すことにしました。食器についても経理担当者が北京より特別に調達して家庭的な雰囲気味わうようにお膳式にしました。

『隼〇一会』第一集より
第一四五振武隊員の回想(大阪・佐野飛行場)

昼の会食のとき、飛行場の川田少佐は、食事しながら主計少尉に一日何カロリー食べさせているか、と尋ねられた。主計少尉が、一般に一日二〇〇〇(キロ)カロリーでよいとされているが、当部隊の将校の食事は、三〇〇〇(キロ)カロリーになるように配慮しています、と答えた。すると、川田少佐は、「六〇〇〇(キロ)カロリー出しなさい」と、いったのである。おそらく、会食していた将校は、全員冗談だと思ったのではあるまいか。しかし、それは本気で出した命令であった。「よいか、特攻隊員は、出撃命令が出ればそれで一卷の終わりだぞ。いくら長く生きても、あと二月足らずの命だ」(随分はつきりしたことをいう人だ)と思いいながら書いていた。「特攻隊員に、ひもじい思いをさせてはいかん。おいしい物

を腹いっぱい食べさせてやれ」「はっ！わかりました」と、主計少尉は緊張して答えた。(中略)さあ、それからの食事は大変なものだ。毎日、刺身と肉と卵と、とにかく六〇〇〇(キロ)カロリーはとも食べきれない量である。これほど優遇された特攻隊員はいないであろう。しかし、もちろんそれは、佐野飛行場にいた間だけのことであったが。

『15時15分前』八塩弘二
特攻機の整備隊 愛児送る母の心 食糧自給態勢も進む

給与方面では特攻隊員専属の炊事場を設けおいしいものを栄養のあるものをと専門の板前さんを動員して料理をさせてをり至れり尽せりの心尽しである、更に自分等は食べなくとも特攻隊員にはしっかりと食べて貰はうと部隊では食糧の自活態勢を着々と進めてゐるが、既に鶏四百羽を筆頭に豚、牛、兎、家鴨等を飼育し、鶏卵は特攻食の食膳に上つてゐる、また二十七町歩の自活農園に甘藷や南瓜、大豆、野菜を植ゑつけることになつてをり、いま暫くの間は副食物だけは地方に頼らずとも自活してみせる」と部隊では意気込んでゐる

『毎日新聞』(昭和二〇・五・二八)

兵站宿舎の食事 第一〇八戦隊(特攻機誘導)菱沼俊雄氏の回想

当時、新田原、各務原、立川などには、特攻隊員を主とする空中勤務者専用の航空兵站宿舎があった。いずれも食糧事情の悪いころだけに、国民大衆にたいしていささか申しわけない感がしたが、宿舎では、できうるかぎりのご馳走をつくつて最大限のもてなしをしてくれた。われわれの間では、俗に「特攻給与」といわれていたが、桃園(※台湾)の兵站宿舎の主任をしていたある軍属は、私たちに他の宿舎の給与の状態をたずねては、桃園の給与こそ日本一とはりきって、改善をおこたらなかった。しかし、これは桃園ばかりのことではなく、新田原、各務原でもおなじであった。

『丸』昭五三・一一
知覧・富屋食堂関係の記録に見る食事
① 第四八振武隊中島豊蔵軍曹
○ 鳥浜とめが中島軍曹の父に宛てた書簡より

「この世の中でほしい品をききましたところ玉子の吸物にシイタケを入れてたべたいとの事で思ふままにしてやりました」

『ホタル帰る』石井宏
② 第七八振武隊勝又勝雄少尉?

「僕の生命の残りをあげるから、おぼさんはその分、長生きしてください」そう言つて、うまそうに親子丼を食べて出撃していった一人の少年飛行兵(※勝又少

尉は、特操二期)のことを語ると、とめさんは、あの子のおかげで私やこんなにも長生きしてしもうた、と涙をにじませた。

『今日われ生きてあり』神坂次郎
③ 第四三二振武隊員による記録

「全員で知覧の町に出てみよう」と言われ、部隊連絡用の定期運行トラックに便乗して町へ出た。降りた所は富屋食堂前。(中略)さて思惑は的中。肴は適当に見繕うように頼み、程良く温めた熱燗で乾杯に入り口に運ぶ。

『懂れた空の果てに』菅井薫
● 近隣民間人の寄贈による食事・食材
① 食材、食品の寄贈(一)

特攻隊の基地はどこまで行つても「リ内地」であった、自分の村から、自分の町から特攻隊が出撃することを土地の人々は知つた、卵、おはぎ、草餅、しるこ、新しい野菜をもつて基地を訪れた。

『朝日新聞西部版』(昭二〇・五・三三)
② 食材、食品の寄贈(二)

基地附近の漁村では警報下命がけで出漁し見事な鯛や鰯を獲つて来ると予め打合せで置いた浜で部隊のトラックに威勢よく積込んで持帰り、特攻隊の勇士の食膳に上らせる、特攻隊員には一日三個以上の基準によつてゐる鶏卵も村人が一個も食べないで進んで供出してくれる、ま

た筈のはしりが出たといつては筈を、桃の節句だといつては草餅を特攻隊にあげて下さいと持ち込む村人達なのである、各部落は競つてあの部落は鶏を持込んだからこの部落はおはぎだと一部落●●の大慰問品も絶へ間がない

『山梨日日』二〇・五・一五
③ 食材、食品の寄贈(三)

地元の町や村の婦人会の人たちが「是非食べて下さい」と真心こめて手作りにした餅や飴や赤飯などの珍しい御馳走をわざわざ携へて来ては、特攻隊の勇士を慰問にやつてくるのだつた。中にはお婆さんもあり、年ごろの若い娘さんもあつたが、しまひには神鷲たちも、慰問隊の御馳走攻めにはさすがに悲鳴を上げ、「もう沢山だから、あなた方の気持だけで十分ですから・・・」と、慰問のお土産を辞退するほどだつた。

『週刊毎日』(二〇・六・一七)
④ 国民学校生徒の姉弟から食品の寄贈

山口県厚狭郡小生直系根学校六年生〇〇さん(一一)とその弟同四年生〇〇君(一〇)の二人は飛行場を訪ね「これは私たちの鶏が産んだ卵です、これを食べると憎い憎い米鬼どもをやっつけて下さい」と卵五十個を出撃間際の神鷲たちに贈つたが時ならぬ少国民の真心こもる可愛い慰問に感謝しながらやがてこの壮途を祝

する酒、卵、りんごで心ばかりの乾杯を行ひ、一機また一機……砂塵を蹴って離陸、堂々たる編隊で翼を振りながら機影を没した

『毎日新聞』（昭和二〇・五・二八）

⑤ 「処女会」の知覧飛行場慰問

私たち女性には、まだ女子青年団という呼び名ではなくて処女会と呼ばれていた。その処女会から、時折手作りの人形とゆでタマゴを持って上別府の山の中の三角兵舎に慰問と見送りに、何回も行ききました（中略）ゆでタマゴを、おすすめしてもありますがと言うだけで、だれも食べる人はいりませんでした。ゆでタマゴ以外に何も持ってゆく物などありませんでした。

⑥ 知覧高女教諭が自宅で供した食事

今の武家屋敷通りの家々に、特攻の方々をせめて一晚、畳の上にお休みいただくようにとの計らいで私の家にも幾晩か幾組の方々がお泊りになりました。物のない時で、卵料理位しか出来ず、決して御満足頂けるようなおもてなしが出来なかつたと思っています。

⑦ 知覧国民学校訓導の慰問

●三角兵舎を訪ねて

児童たちが丹念に書いた手紙や、人の顔を描いた卵を持って慰問した。屋根の低い兵舎には三々五々固まってくつろい

でおられた。中央を通りつゝひとりひとりに手渡すと喜んで受け取って下さった。⑤⑦は『特攻のまち・知覧』より引用

目達原の飛行場大隊将校の回想

目達原飛行場は陸軍特攻機の後方整備にあたっていました。此処で充分な整備を行い、鹿児島県の知覧又は万世の第一線基地より出撃するため一週間から十日位特攻機の操縦士は養生のため滞在しました。その間操縦士の特攻隊員はこの世の別れとばかり食事は特別の航空食を支給され、酒も充分にあるため殆ど毎晩のように地元婦人会が特攻隊の慰問に来て宴会が開かれました。戦時中は特攻隊は神様と言われていたため、中には慰問隊との風紀を乱す者もあり、一方整備隊は夜を徹して整備に努めていたため特攻隊と感情的軋轢ができ、我々は部下の統率には苦勞をしました。

『人に歴史在り』

(イ) 前線における食事

ここでは、出撃待機中や出撃前夜の食事について紹介する。一部、新聞記事の紹介の中では、取材地が不明で「出陣」としながら訓練地の単なる移動も含まれるかも知れず、この点ご了承いただきました。

都城東飛行場と思われる振武隊員歓迎会

今宵振武隊の勇士を迎へた基地にはさ

やかな歓迎の小宴が開かれた、板張りの屋根だけが地表に出てゐる、半地下式の粗末な部屋―土間の上に机と椅子を置けばそれが特攻隊の勇士達を迎へる会食場となるのだ、折柄停電のため電灯のつかない部屋には大きなローソクがともされこれが却つて勇士達を迎へるに相応しい厳肅な光景を描きだした、テーブル掛もない机の上に並べられた料理も質素ではあるが高級主計自ら包丁を握り、心をこめて料理したもののばかりである

『朝日新聞西部版』（昭二〇・五・二七）

※記事、イ隊長、夕伍長と出てくるが、これが伊東少尉、高埜伍長であれば都城東飛行場から出撃した第五七振武隊である。

第四三三振武隊 飛龍荘での食事

記者はまさに不還特攻の壮途につかんとする特攻隊の基地宿舎を訪れた（中略）待ちかねたやうな美しい夕餉の膳が運ばれて来る、鶏の吸い物、かしわ飯、卵、沢庵など素朴な田舎料理ではあるが宿舎のをばさん達がまごころこめて贈る晩餐である

『朝日新聞西部版』（昭二〇・六・二）

※万世飛行場付近の軍用旅館飛龍荘（料亭柳月）は六六戦隊将校及び万世飛行場からの出撃を控えた特攻隊員の宿泊する加世田の飛龍荘であった。

隊員の行動は飛龍荘から直接飛行場に赴く場合と、飛行場近辺の三角兵舎に一旦待機、宿泊する場合があった。

飛龍荘 第四三二振武隊員菅井薫氏手記

部屋に戻って、支度のすんだ夕餉の膳を前にする。文字通り最後の晚餐である。用意された料理は目に初見参の珍しい品々が揃えられていた。酒もさることながら、一品毎丹念に口に運んでは味を楽しみ、友と感嘆の声を交わす。主人は精根を込めて作られた料理と思われ、その道の奥の深い所業に感銘を受けた。人生最終の晚餐にしては、余りにも陽気な会食である。

『憧れた空の果てに』

村人の心尽しに「名代の包丁」

最後の晚餐 徹宵調ふ「特攻隊の台所」

特攻隊の宿る疎林の中の三角兵舎につづいて粗末な一棟のバラックがある

朝夕に長田狭田の稲の種を食ふも皇恩なり 北島 親房

墨痕淋漓と大書した紙が入口の鴨居に貼り付けてある、ここが特攻隊を賄ふ台所つまり炊事場だ、ここで限られた材料を前にして特攻隊の「最後の晚餐」をどんな御馳走でもてなさうかと献立に苦心の作戦協議が凝らされる、ここにもまた隠れた戦ひのページがある

酔のもの(キャベツと鶏卵) 刺身(鰯)

肉と野菜の煮込み(牛缶、大根、里芋) 吸もの(鯛)てんぷら(伊勢海老)ほかに生鶏卵二個、甘味品百廿哆(酒保で手製の麦菓子) 夏蜜柑二個、清酒三合

ある日の特攻隊の最後の晚餐は基地としては出来る限りの御馳走であった、これだけの献立は材料を集めるのにも献立を組むのにも並々ならぬ炊事班の苦心があつた、殊に黎明攻撃ともなれば材料の鮮度の点検や献立の設計、調理の準備などで特攻隊が神のやうな無心な夢路を辿るときひとり炊事場だけは夜を徹してまるで戦場のやうであつた

炊事班の参謀本部は応召前鉄工統制企画部施設課に勤めてゐた寺口基兵長が献立係として材料蒐集から献立編成まで得意の腕を振り、調理現場指揮には東京の魚市場で有名な魚問屋の主人保坂保義さん(四七)が二代ののれんを擲つて名代の包丁の冴えを見せ現場炊事の責任者として入隊前本職の板場を七、八年もしてゐた野口力男上等兵といふ陣容で七名の兵と勤労奉仕の村の娘さん三名を指揮してゐる、(中略)特攻隊の食事献立はたとへば藪や豆類のやうに消化が悪く腹にガスの溜まるものはいけないといった具合に鮮度と品物の選別が極めてやかましいがそれでも梅の花が咲くころになると季節の春鰯、桜の花が散ると初夏の鯛

といった具合に季節を外さぬ基地心づくしの調理はどんなに特攻隊を慰めてゐるだらうか、大釜一、大鍋二の粗末な野戦調理台ではあるが炊事班は基地周辺の村人の心づくしによつて蒸気がなければ釜を利用して茶碗蒸も出来、江戸前料理の卵豆腐も作られてゐる、出撃にあつた特攻隊の食欲は子供のころから食ひなれた淡味な純日本食を好み、たとひその茶碗蒸が道具と手の揃つた有名料亭の本式料理とはいへぬまでもその鮮度、ましてその中にこもる炊事班員や村人の温かい情はどんな山海の珍味よりも特攻隊に一番ふさはしいものだつた

『毎日新聞大阪版』(昭二〇・五・一四)

神鷲の食事心配ご無用

「菜つ葉汁で腹拵へ、勇躍出撃する特攻隊勇士達」……これらの新聞雑誌記事などを読んで「神鷲様達にそんな不自由をさせては申訳ない」と基地附近の農漁村から新鮮な魚、卵、鶏、野菜、果物などが勇士達に贈られた佳話も多いが、軍でも特攻隊の食事給養にはとくに留意してをり、第〇航空技術研究所では特攻隊の給養如何にとこのほど主計将校二名と専門の調理士三名それぞれにお菓子屋さん二名をつけて各前線基地を巡回指導させてゐるが、某日基地における壮行の出陣食ではありつたけの材料総ざらひでチキンカ

ツ、冷肉、鯉のあらひ、野菜サラダ、鯛めし(鯛茶にあらず米飯に鯛でんぶ)それに昔なつかしいみつ豆(但し豆は大豆)

さらに近県産の枇杷、水蜜桃を加へて錦上花を添へ、明日は出撃の勇士達に「これは凄いと喜ばれた

『朝日新聞大阪版』(昭二〇・六・二五)

※「錦上花を添へ」は、美しいものに更に美しいものを加えるという意味

徹夜で『御馳走』作り 特攻隊の母親・炊事班

特攻隊の泊まる疎林の中の三角兵舎につづいて一棟のバラックがある、ここが特攻隊のを賄ふ台所、つまり炊事場である、材料をあつめるのにも献立を組むのにも、なみなみならぬ炊事班の苦心がある、殊に黎明攻撃ともなれば材料の鮮度の点検や献立の編成、調理の準備などで特攻隊が神のやうに無心な夢路を辿るとき、ひとり炊事場だけは夜を徹して戦場のやうである。炊事場の苦勞もさることながら特攻隊のためとあればどんなものでも惜しみなく贈らうといふ基地附近の村人たちの心からの協力も見逃せぬ。ただ『これは豪勢だ』『実に御馳走だ』とみんな舌鼓を打ち『最後の晩餐』を本当に心から愉快にすごしてくれたことを当番の口から聞けば、もうそれで十分満足なのだ

まるで遠足に行くやうな気持です、けふの獲物が大きいかどうかと胸をわくわくさせて

と出撃の心境を語る特攻隊に対して、これはまるで愛児の遠足に海苔巻もつくつてやりたい、玉子焼も入れてやりたいと一人台所の隅でいそいそと気を遣ふ

母親の愛情に似たものがある

それでいいんです、いざ出撃といふ特攻隊にはそんなことまで知らせない方がいいんですよ、われわれはこれが任務ですから

炊事班の人々は特攻隊の母親のやうに度しくいふのであつた

『防長新聞』(昭二〇・五・二五)

※この取材地は文中からは確認できないが、この記事を書いた毎日新聞社特派員の吉岡氏は五月二八日の知覧での特攻出撃時の記事も書いているので、これも九州方面と推測する。

第五一振武隊 出撃前夜の描写

急に室内が騒がしくなった。当番兵が食事をくばりはじめた。「おっ！こりゃすごい」「でけえオムレツだなあ」と、にぎやかである。食糧が、いよいよ窮屈になつてきた時である。「一般の軍隊では、赤い高粱飯をたべていた。特攻隊だけに、たくさんの御馳走がでた。ことに、最後の夜食であつたから、特別の献

立であつた。魚の肉のはいった、すまし汁。たけのこの煮つけ。オムレツ。それに特別にたいした真白な飯。「これが、最後のたべおさめか」と、島伍長が冗談にいう。「こんなに御馳走があるんなら、毎日でも特攻に出たいもんだ」と食欲旺盛な安藤伍長がいう。「オソマツな野郎だな。こんなご馳走ぐらいにびっくりして、食いで特攻に出られてたまるか」と島伍長がやりあう。隊員たちは、健康な食欲を見せて、みんなたいらげてしまつた。

『遺族』高木俊朗

第二二振武隊大貫健一郎少尉の手記

明三日は出撃である。軍司令官よりと貼紙の四斗樽が持ち込まれ鏡を抜き手柄杓で別れの酒を酌み交したが、暗い裸電球の三角屋根の下では座も弾まず早目に床につく。

『特操一期生史』大貫健一郎氏寄稿

第三〇振武隊河崎伍長の証言と見られる情報

夜の食事の時には、卵焼とかトンカツのとうような、そのころは一般には見られないごちそうが出た。だが河崎伍長は、たべ物がのどを通らなかつた。自分からだのせいかと思つたが、ほかの隊員もたべてはいなかつた。大櫃隊長が、「もつと、くえよ、どうしたんだ」と再

三すすめた。だが、だれもがそれ以上たべようとしなかった。

『特攻基地 知覧』高木俊朗
誠第四一飛行隊 沖繩中飛行場前進前の
食事(知覧三角兵舎)

昼食時になり机の上に配膳が始まった。女学生四人も手伝い旁、給仕の為に来た。

(中略)そこへ慌ただしく整備の伍長が入って来て配膳中の昼食を横目に「昼飯を少し待って下さい。この近所の兵隊が鮪を土産に持って来ましたので、今刺身を作っています。もうしばらく待ってください」と伝えに来た。「やあ、すまんな、鮪の刺身が食べられるなんて」

『憧れた空の果てに』
知覧国民学校訓導たちによる出撃前夜の
壮行会

明日出撃という前夜は、学校の裁縫室で壮行会をして上げた。女子職員一〇名の手作り、物資不足の時代だったが、方々からかき集めたお粗末な煮つけなどを囲んで盃を交わした。中には「別れの盃だ、是非受け取って下さい」とせがむ人もいた。きつと自分の家族に代わる気持ちで進められたのでしよう。

『特攻のまち・知覧』

第一一〇振武隊 知覧出撃前夜の食事

夕食の時間が来た。三角兵舎の中も灯

火管制で電球の下が明るいだけである。中央通路の土の上に食缶が運ばれた。炊事係の兵隊が白いご飯と肉の煮込みを山ほど盛り付けてくれた。清酒一本(二合)も配給された。酒も飲んだ。私は酒は一口で他は部下に与えた。これが最後の晩さんであった。

『大空は父なりしか』窪川敏郎

飛行第六二戦隊(大刀洗)前村弘氏証言

ピストに戻ると、建物の中におさげとご馳走が用意されていた。出撃は午後三時過ぎだ。「ご馳走がいっぱい出てたけどね、胸がいっぱいでも食えなかったですよ。鯛の塩焼きとか最高の蒲鉾も並んでいたと思います。私なんかはとても見たことのない料理でした。出撃前のお祝いだと言わんばかりのね。恩賜の煙草もくれました。僕はもともと酒は飲めないから飲まないしね。酒を飲んでるのは、出撃しない人たちですよ。(以下略)」

『太平洋戦争最後の証言零戦・特攻編』

(ウ) 出撃直前の食事

この項では、記録の内出撃直前と分かるもの、或いは出撃待機中の三角兵舎等における食事について紹介する。

知覧高等女学校生 永崎笙子さんの手記

食堂では、すでに並べられているアル

ミ製の食器に盛り付けをし、それが終わると兵舎の兵隊さんに「食事の用意ができました」とふれ回ります。食事は、あとわずかしかない方たちに対するせめてもの心づくしでしょうか、当時の私たちには、ほとんど見ることでできなかった白米のご飯に、これも貴重だったお肉や、お魚のおかずがついていました。

『知覧特攻基地』なでしこ会編

第八〇・第八一振武隊残員 知覧飛行場

出撃の朝 二〇・四・二六?

真夜中、当番兵が時間ですと起しにきた、ぐつすり眠ってゐた特攻隊員ははね起きた、手早く身支度すると顔を洗った、当番が板にのせた握り飯を持ってきた、油のしみた航空服を着て、航空帽を冠つたまゝ隊員は手づかみで握り飯をむしやむしや食べた、握り飯は白米ではなかった、三分搗きで、ところどころに赤い豆が顔を出してゐた、特攻隊員も節米なのであらうか、隊員は立つたまゝ急いで食べるのか、二つ目は喉をめしがなめらかににじらない様子であった、当番兵がやうやく副食物らしいものをひと皿工面してきた、あゝ、それは昨夜の夕食の残りではなからうか、夕食の副食物と同じであった、ごぼう、人参、筍の煮付であった、隊員はつまんで食べた『おいこれア素敵

だ、うまいぞうまいぞ』と橋本軍曹がいつた『おいおい途中で食いすぎるなよ、途中でビリビリとやったら、面倒見てやれんぞ』と渡辺曹長が笑つた

握り飯はそんなに大きくはなかつたが、

だれも二つ以上は食べなかつた、そしてみんな洪茶をすすつた、洪茶は前夜から当番兵が苦心してこしらへたもので番茶を熱くして冷やしたものであつた、熟睡時間に起されて感覚の尖つた舌の上に洪茶はしみる程にうまいらしい、私たちが

最後にお茶をのむのとは違つてゐた、隊員のむ洪茶は眠気をさまし元氣をつける。菓りであつた、別の特攻隊を訪れたとき昼食を御馳走になつた、私は御馳走になつたと書くが、それは。給与を受けたりからで決して世にいふ御馳走ではなかつた、それは筍が九分、さと芋が一分、めしは矢張り粗の多い五分搗きぐらゐであつた。これは搭乗員であつて、整備兵や地上勤務兵はお赤飯かとお見違へるほどの高粱めしであつた

『特攻隊員にはうまいものを食べさせてあげたい』これは国民すべての念願であるのに私がこの基地を訪れてはつきりこの眼で見、この口で味はつたのはかういふ粗末な食べものだったのである。この方面の陸軍航空部隊最高指揮官も『振

武隊員を特別優遇しない』といつたが、

特攻隊員の衣食住はすべてあまりにも質実簡素であつた(後略)

『朝日新聞西部版』(昭二〇・五・三)

第一一〇振武隊員窪川敏郎氏の回想 知

覧飛行場 二〇・五・二六

(出撃の日の朝)

朝食は銀めしに卵一個と梅干し三個と味噌汁一杯であつた。うんと食べるよと伍長らにすすめた。他に言うべき言葉はなかつた。

(出撃時間を十三時と伝えられて)

十一時半頃に日の丸のおむすび三個を平らげて、松林の中を愛機めざしてかけた。

『大空は父なりしか』窪川敏郎

第四五振武隊宮之原太吉氏の手記 知覧

飛行場 二〇・五・二八

攻撃当日の朝は、隊長以下三角兵舎で午前三時前に呼び出しを受けた。勿論灯火管制下で黒い覆いをかぶり薄暗い裸電球の下で、運ばれて来た最後の朝食をとつたのであつた。その晩は、約五時間の就寝時間だったが、ぐっすり寝込んで夢一つ見ることもなかつたように思う。

食餌は確か浅草のりと生玉子がついた味噌汁の献立であり、それをおいしくというより我武者らに全部平らげたことも覚えてゐる。

『特攻隊の思い出』

第一一三振武隊 椿恵之氏の手記(知覧飛行場二〇・六・六)

私たちは最後の食事をとつた。死地向う最後の日の朝食だった。それだからといって、別段これという特別の料理ではなかつた。味噌汁と焼のりと生卵一個、それに香の物であつたが、私は今までになくそれをうまいと感じた。もう二度と食べられない食事、私は米の一粒一粒を噛みしめるようにして、その味を楽しんだ。

『消耗人間』椿恵之

誠第四十一飛行隊久貫兼資氏の回想(知覧飛行場)

兵舎に戻ると既に朝食の準備が出来ていた。隊長以下全員食卓に着くと当番兵が味噌汁を注いでくれる。少しでも温かいのをという気遣いである。汁の味も格別旨く仕上げたように思われた。皆の食欲は旺盛である。実に良く食べる。当番兵は我らの見事な食欲に当番としての張り合いを感じた如く、甲斐々々しくふるまっている。飯の量も多過ぎるぐらいに用意されていた。

『憧れた空の果てに』

火野葦平氏の記述より

三角兵舎のなかには今夜出て行く振武隊の勇士がさつきまで眠つてゐた。(中略) 彼等の朝食が始つた。今朝の献立は

慰問、ここの部落の人たちが届けて来た心のこもった握り飯や、おはぎや夏蜜柑、卵などである。

『西日本新聞』(二〇・五・五)

振武隊出撃の前夜 最後の飯に舌鼓
童心で燥ぐ隊員たち

最後の食事午前零時―『あゝ最後の飯を食つちやつた』何気なく叫んで唇をこする、白米の飯、卵二個、味噌汁一杯、出撃の朝のお膳立てだ、噛みしめるやうに箸を運ぶ、一人の神鷲に『うまいですか』といふと、『うまいですね』とにっこり、やがて便所から帰つて来た神鷲は『最後の飯も食つた、あアサバサバした、思ひ残すことはないぞ』といつて出撃の支度をはじめた

『毎日新聞』(二〇・五・二八)

第五三振武隊残員 知覧出撃の食事 二〇・六・八

「当番、夕食の準備終わりました。一と当番兵が食器の音を響かせてきた。井に一杯飯が盛られてゐる。けふのおかずは野菜のフライ、ぶりの煮つけに生卵二個、いつ出撃するかわからぬ特攻隊にとつては、これが最後の食事になるかもわからないのである。体力の消耗の激しい空中勤務者たちは、かうした特別給与の空勤食を摂らねば身体がもてないのであるが、特攻隊員たちはとにかくそれを気の毒が

るのである。ところがその日の夕食は最後の晩餐にならなかつた。〃坊や〃の組の攻撃は「明払暁」との命令が下つたからである。起床三時三十分、出撃時刻は〇時〇〇分。(中略)当番に呼び起されてみると、はや朝食の準備ができてゐる。〃坊や〃は溪流で最後の洗面をすませ、冷たいタオルで上半身を拭き浄めて、すがすがしい気持になつた。熱い天井をフウフウ吹きながら掻き込む最後の朝食の味は、何ともいはれなかつた。

※記事中の「坊や」は第五三振武隊の河井秀男伍長を指す。記録によると知覧飛行場からの彼の出撃は昭和二〇年六月八日とある。

『週刊毎日』(二〇・七・一五)

第五一振武隊 知覧飛行場出撃の朝 二〇・五・一一

くら闇のなかから声がした。「起床の時間でありませう。三時半であります。」起床を伝えて歩く当番兵の声である。くら闇の三角兵舎のなかを、当番兵が電燈をつけて行くと、あちこちから、ごそごそと起きあがってきた。(中略)朝食がくばられてくる。卵、みそ汁、それに、たきたての白いめし。元気な安藤、島伍長らが「それ！めしだ！めしだ！」と騒ぎ立てているが、いくらか気おいこんでいるようであつた。もうもうと白っぽく

埃の浮いた電燈の光のなかで、それぞれに手早く食事をすませる。

『遺族』高木俊朗

第一九振武隊 知覧飛行場出撃 二〇・四・二九

出撃のその夜月光を浴びて勇躍出撃した四宮中尉の姿は颯爽意気天を衝くものがあつた、河野少尉と一つの林檎を分けあつて半分づつ仲よく食べ『随分お世話になつたね、俺は必ず命中する、整備の苦勞は無駄にはしない』と整備部隊勇士の働きを深く感謝し、決意のほどを語りつゝ隊員より一番遅れて悠々機上の人となつた

『毎日新聞』二〇・五・七

万世飛行場出撃隊員 飛龍荘の朝食弁当
①第四三三振武隊倉田道次少尉について
飛龍荘の女将の手記(二〇・五・二七か)

出撃用の、オニギリを作つてる台所に現れ、「そのオニギリを食べる時間には、死んでいるのだから、作らなくていいよ」と云われ、居合わせた婦人会の人たちは、泣いた。(中略)「オニギリを作る、難儀をしないで下さい」とも云つていた。(出撃前日の回想と推測するため二七日とした)

②第七二振武隊千田孝正伍長について機付長宮本軍曹の遺族宛書簡(二〇・五・二七)

陽はまだ出ていません(中略)孝正君は飛行機の所へこられました。(中略)ふるしきを出して、「宮本軍曹殿弁当食つて下さい。」「いゝよ君の朝めしだろう。」「でももう三時間もたてば突込むんだからいらぬ。今腹もへつてないですから」「食へよ。腹がへつては戦が出来んぞ。」「すぐでかい空母を喰ふんだから弁当なんか喰つては喰すぎで腹をくはしますよ。」と、心にくい言葉に私は風呂敷づつみを持たされました。

①②は『万世特攻隊員の遺書』より
 ③第四三二振武隊員手記による飛龍荘の朝食弁当 二〇・五・二八

宿舎の人達がお茶と、朝の弁当を運んで来た。弁当には寿司をこしらえましたという。朝食には時間が早すぎ、飛行場で食べるべく用意されたものだった。

『憧れた空の果てに』菅井薫
 第二九振武隊員の回想、出陣のお汁粉

その日は、珍しく晴天の日だった。命令でその日に出撃するのは私の小隊だけで、美野伍長と安部伍長と私だけであった。とうじ酒をたしなめない私は、最後の盃がわりに町民がだしてくれた、おしる粉をたべて機上の人になった。

『丸 昭和四五・三』柴田信也寄稿
 第一特別振武隊出陣の甘味品 二〇・四・

六

〇〇航空部隊指揮官の烈々たる訓示を受けた後、隊員達は僚友と別れの談笑に一時を送りおはぎ、まんじゅうに最後の肚をつくつて機上のひとになったのであった

『読売報知』二〇・四・一〇
 第一〇五振武隊員の手記 知覧飛行場 二〇・四・二八

この頃は、飛行機の後方には一般の人々も見送りに来ており、花や夏みかん等を頂いた。それを操縦席の後や天蓋の部分に収納した。六〇〜七〇歳位の女の方が、私の所に来て「年はいくつですか」と尋ねられたので「二〇歳(十八歳)です」と答えた。そしたら「芋飴を作ってきたので一個でいいから食べて下さい」と袋から出して渡されたので、一個を口に入れたが、その時は何も食べたくなかった。その人に見えないように、九七戦のエンジンの前に行き、口からソーツと出してすまないと思ひながら土に埋めた。

『特攻残記』佐藤亨
 (エ) 出陣用特別食

記録の中には一部共通する、紙箱に入っている酒・肴の詰め合わせというものが出てくる。出撃当日に渡される場合と、事前に渡される例があるように、後者の場合は保存の効くものが中心に入れられていたようである。また、本土防衛特攻

隊「決と号」の神鷲隊の回想は概ね一律であり、規格生産されていたものなのか大変気になるものである。また、菊の紋が印刷されているという回想もあり、今後の研究の手掛かりとなるのではないだろうか。なお、『昭和史の天皇』『天皇と特攻隊』の両書には、昭和二〇年正月に天皇へ出された、「特攻隊員に対し、その壮途に餞として出す料理」なるものに、以下に紹介する例と類似した記述があるが、こちらは海軍の物とのことで関連性は無いものと判断する。

第二二振武隊大貫健一郎氏手記による知覧進発時に支給された弁当

午後三時半出発の命令が下る(中略)昼食は二時頃飛行場で摂る事にしたが、一尺角位のボール箱で見ると御紋章が入っており、御下賜の立派な弁当で二合瓶の「澤の鶴」に素焼の盃、煙草何れも菊の紋があり、中身も贅を凝らしてあったが、酒だけ戴き、整備兵に渡して了った。

『特操一期生史』大貫健一郎寄稿
 ※『特攻隊振武寮』には、右に加え「寿屋のウイスキー」「幕の内のごちそうの数々」とあり。

第一一〇振武隊の窪川少尉が入院中に渡された箱入り糧食「神洲献立」

五寸×一尺くらいのボール紙を出して「これが見舞いの品だ。」とて私の枕

元に置いてくれた。紙箱の上には「神洲
献立」と大きな活字が四つ並んでいた。

中身は地元産の羊羹とミカンの缶詰、夏
ミカン、酒の小びん二本とアメ玉が沢山
入っていた。

『大空は父なりしか』窪川敏郎
特攻掩護戦隊員の回想による「特攻弁当」
※飛行第一〇三戦隊 昭二〇・三〇四頃
航空総攻撃の朝は「特攻弁当」と称し、
三重の折詰弁当がでた。中味は、当時で
はみる事ができない心づくしの副食に、
デザート菓子や果物がはいってあり、
楽しみであった。特攻隊員たちはこの食
事を賞味し、最後の想い出として飛びたつ
たことであろう。いつの頃からかこれも
廃止になったらしくわれわれの口にはい
らなくなった。

『丸 昭和六〇・三』片山千彰寄稿

第二〇一神鷲隊 横山善次少尉の遺書

ほんの少しでは有りますが、このトラ
ンクに入つて居る品は、私が一生懸命に
ためたものです。食べたかったのを食べ
ずのためました。大きな箱の中に入つて
居る清酒其の他の品は、七月三十日の出
撃準備命令と同時に出撃者のみ頂いたも
のです。牛缶等皆様と一緒に食べたかつ
たのですが、それも出来ませんでした。
ほんとうにつまらぬものばかりですが、
これが私の最初で最後の心からの品です。

箱の中の品は私の写真と一緒に食べて下
さい。

『八月十三日の神鷲』
雑誌「丸」第二〇五神鷲隊長 河野洋輔
氏の手記

車座になって、最後の出撃糧食をひら
く。恩賜の酒、勝栗、するめなど縁起の
よいものが詰めあわさされていて、なか
かおいしい。

雑誌「丸」四八・一一号

第一八六振武隊長 落合成郎氏の回想

落合成郎の話では「出陣食」という
三〇×四〇cm大の箱に恩賜の清酒ほか酒
肴が詰まっていたセットがあったという。

『陸士五十七期航空誌 総合編』

第二〇三神鷲隊長 長峰郁郎氏の回想

長峰郁郎はこれを「特攻詰食」と記憶
しており、内容は清酒一合瓶のほかには勝
栗・するめ・昆布など詰合わせの厚紙箱
入りであったという。

『陸士五十七期航空誌 総合編』

第二五三神鷲隊長 浅野満祥氏の回想

七月一日(中略)敵艦隊の情報が把
握できず、出撃中止の命が下った(中略)
隊員一同、「まだえん魔様がお呼びでは
ないようだ」と冗談を言いながら、既に
配られたボール箱に詰められた特攻糧食
を開いた。勝栗・するめ・羊かん・タバ
コ(ひかり)などが詰められており、何

か妙な感じがしたものであった。
『那須の太平洋戦争』

第二六六振武隊長 千葉清悦氏の手記

私は第二六六振武特別攻撃隊として出
撃間近ということ、恩賜のミカン箱く
らいの中に菊の紋のついた、航空元氣酒
やチョコレート、菓子など詰まったもの
を持つて、四十八時間の休暇をもらい・・・
『戦争体験記』宮城県大崎市市民協働部
推進課

(筆者注)航空元氣酒は空中勤務者に対
して着陸後の速やかな疲労回復を促すた
めの飲料であつて、度数二〇度である。
〔五〇年前日本空軍が作った機能性食
品〕所収の成分表より)これらの詰め合
わせが出撃直前に用いることを目的とし
て渡されたものかは定かではない。

(才)機内携行食

知覧高等女学校生 永崎笙子さんの手記

①ある日、私たちは当番兵から徳之島前
進の特攻機におにぎりを二個ずつ積み込
むように言われました。(中略)ただ、
おにぎりを配るだけでは、どうしても私
たちの気持をあらわすことができないよ
うな気がして、機中の隊員の方に桜の小
枝を差し上げましたところ、隊員の方は
たいへん喜ばれ、「ありがたい、ありが
とう」と何度も繰り返されました。

『知覧特攻基地』なでしこ会

②「そうでした。もう一度わんわん泣いたことが、ありましたわ。四月三日のことでした。第三十振武隊大櫃隊の出撃の時でした。大櫃隊は(中略)徳之島前進の命令が出ていたんです。私たち、おにぎりや二個ずつ積みこむように言われて、積みこんだんです。ええ、なぜ積み込むのか、その時は不思議でした。もうすぐ亡くなる方たちなのにつて。でも、私たちは作戦計画は知らされていませんでしたら、分かりませんでした。おにぎり二個、それにたくわんの黄色が浸みだしていました。積みこんだら、こんなもの食べるかって、機外に放り出した方があって、つらくて、洋子さんとふたり、手ばなしで泣きながら家に戻りました。」

『白い雲のかなたに』島原落穂

あゝ最後の握り飯

竹の皮につゝんで海苔まきの握り飯が三つ、たくあんが三切れ添へてある、握り飯は眩しいやうな白米のごはん、二つに割るとまん中によく漬つた梅干しがばかりと赤くにじんである、これが振武特攻隊の最後の弁当であつた、時間をはかれば、沖繩への航程のちやうど三分の一のところ、勇士たちは機上にひとりこの竹笹をひらき最後の昼餐をとることになる、それにしてもこれはなんとすばらしい弁当ではないか、白米も海苔も梅干

もたくあんも、それから簡素な竹の皮まで祖国日本の心がしみじみとそこに光つてゐた

握り飯といふのがいつのころから日本にあつたのか記者は知らない、けふよりかはへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つた防人の戦ひの門出にも恐らく握り飯があつたであらうが、これはどうしても我等の祖先の尚武の血、戦ひの生活、細戈千足の国の伝統の中から生れてきた最も純粹に日本的な糧でなくてはならない気がする、沖繩の海に祖国の運命を担つて突ツ込む特攻隊員の弁当が握り飯であつたといふことは、極めて陶然のことでありながら、しかも記者の心を強くうつた

飛行ズボンの膝のうへにふくれた大きなかくしに、特攻隊員はみなこの握り飯の竹笹を無造作につゝこんで出て征つた、第二次特攻総攻撃の火蓋がきられてすでに三日けふもこの基地に陸続として振武特攻隊の大量出撃がつづく

『毎日新聞(東京)』(二〇・四・一九)

第五一振武隊出撃の模様を報じる記事

桃太郎のきび団子もどきのお握りを一つ朝飯の代りに持つて：

『鹿兒島日報』(二〇・五・一九)

第七七振武隊隊員 出撃時の回想

発進直前、長崎カステラ、夕飯、ドロツ

プが整備兵によつて操縦席に入れられたが、冥途の土産のつもりであるうか。カステラは世話になつた整備兵に渡した。『陸軍少年飛行兵史』秋村友芳氏寄稿

おわりに

以上、筆者が半年間かけて収集した事例について紹介させていただきました。未だ既存出版物全てを網羅できてないと思ひますが、基礎的研究として一つの形にできたのではないかと思います。毎回、事例の列挙に終始してはいますが、体験者からの取材が困難となりつつある現在にあつては、その記録の断片を拾ひ集めるほかに術がありません。近年、特攻隊についての扱いが、「侮辱か、賛美か」の二極化する中で、そのどちらかに付ねばならないような風潮があります。しかし双方の主張は自分に合つた証言を選び針小棒大に宣伝する空虚なものです。読みづらい点については深くお詫びいたしますが、今後も、その二極化に抗つて事例の収集に取り組みたいと思ひます。尚、今回省略した航空糧食及び機上薬品については別の機会に寄稿したいと思ひます。

☆おわり☆

連載山ある記19

静岡県「暗沢山」
会員 池田 康博

伊豆半島に三か所しかないという「二等三角点のある山」の一つが、標高五百二十m、西伊豆の「暗沢山」だと知って出かけた。

松崎町にある国の重文、岩科学校の駐車場（標高10m）に車を置いて9時30分に出発、岩科川に架かる橋を渡り、山に向かって民家の間を歩いていくと、小さな地藏尊が安置されている場所に「長者ヶ原遊歩道」の案内板があった。ここから山に入る。

最初は沢沿いの道だが、石がゴロゴロして歩きにくい。途中、コンクリートで舗装して



暗沢山頂の一等三角点

ている道もあるが、土砂や木の枝が積もっており、足を取られそうなく。指川峠にかかると、車で登ってこられ、舗装道路と

合流した。民家らしき家もある。更に登ると、今度は地図には無い「峰分岐」と書かれた標識があり、また舗装された道路が現れ、明らかに人が住んでいる家もあって驚いた。この「ボツンと一軒家」を過ぎて、さすがに人の気配もなくなったなか、頂上目指して登って行く。登山道にはイノシシが掘り返した跡が各所に見られた。その様子といい、道の荒れ方といい、とどこころに階段状の道は整備されているものの、登山者は殆どいないものと思われる。

11時5分には大峠に到着、ここが暗沢山と長者ヶ原遊歩道との分岐点である。道を左に、暗沢山に向けて緩い下りを進むと、この山の頂上にある電波中継塔への管理道路に出た。ここで初めて「暗沢山」と書かれた標識を確認した。この管理道路を登って行き、11時18分に中継塔の外柵を回り込んで山頂に到着。一等三角点にタッチして昼食とした。山頂にはベンチが設置されており、富士山と松崎海岸の景色をたっぷり楽しんだ。

12時になって、富士山頂にも雲が掛かり始めたため下山にかかった。もと来た道を大峠まで戻り、大峠の分岐で長者ヶ原の方に向かうが、少し行くと台地状になった地点に出た。ススキの中に東屋も整備されている。このススキの原を下っていると猟師と出会った。聞くと、伊豆でもイノシシが増えているという。登山道が各所で掘り返さ



山頂から、富士山と松崎海岸

れていた事を言うと、ミミズなどを探した跡だとのこと。

長者ヶ原の手前の小峠まで降りて、岩科学校への道を下って行く。途中、また猟師と会ったが、「あなた方が下っていることを仲間に無線で知らせてください」と言われた。猪狩りのために、山の斜面を囲むように人を配置しているのだろうか。しかし、この道も荒れた道で、登りと同様、積もった木の枝が散乱し、イノシシが掘った跡に加え、登山道の崩落箇所もあった。民家のある一般道に下りるまで気の抜けない下山で、低山にも関わらずいつも以上に疲れた山歩きであった。

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式
編集長 金子 敬志

令和4年4月2日(土)鹿屋市小塚公園慰霊塔前広場に於いて「令和4年度旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」が執り行われました。

この追悼式に藤田理事長とともに参列させて頂きましたので、概要と所見を述べます。

一 追悼式の概要

追悼式は、小塚公園内にある「特攻隊戦没者慰霊塔前」に於いて10時30分から執り行われました。式次第は次の通りです。

- 1 開式のことば
- 2 一同拝礼
- 3 国旗掲揚
- 4 国歌斉唱
- 5 追悼飛行
- 6 式辞
- 7 追悼のことば
- 8 献花
- 9 儀仗隊弔銃
- 10 式電披露
- 11 平和メッセージの朗読
- 12 国旗降納
- 13 一同礼拝

14 閉式のことば

当日は穏やかな天候に恵まれ、追悼式は式次第に従い粛々と斎行され、11時40分頃、滞りなく終了しました。

二 所見

まだコロナ禍が完全に沈静したわけでは無いため、規模を縮小しての開催との事で、ご遺族29家族71名を含め、約200名の参加で、例年の半分程度との事でした。縮小でもこれだけのご参列があるのは、慰霊に対する意識の強さを感じました。

鹿屋市が主催し、追悼飛行、国旗掲揚・降納や儀仗隊などは海上自衛隊第一航空群が全面的に支援する形の本追悼式は、今後とも安定して斎行されるものと思えます。



献花する藤田理事長



開式を待つ参列者



テント脇に設けられた受付

戦艦「大和」戦没七十七年追悼式に参列して

評議員 及川 昌彦
評議員 高松 真希

一 概要

令和四年四月七日木曜に開催された追悼式に理事長代理として村川豊元海幕長、高松真希評議員と共に参列しました。

呉の旧海軍墓地の「戦艦大和戦死者之碑」前にて戦艦大和会主催で10時開始、海上自衛隊第一術科学校のラッパ隊による軍艦旗掲揚後、黙祷、小笠原臣也戦艦大和会会長による式辞、追悼の辞、来賓紹介、献花奉納、軍艦旗後納、閉会の辞の次第で開催されました。

戦艦大和会は日本の新生にさきがけて未曾有の国難に立ち向かった戦艦「大和」乗組員の志に対し、追悼式や行事等を行い、鎮魂の慰霊、偉勲の顕彰、遺族の思い、造船技術等を後世に伝承していくことを目的として毎年四月七日に呉海軍墓地での追悼式、戦艦「大和」に対する研究会（勉強会）を実施しています。小笠原会長は元呉市長です。

主な参列者として海上自衛隊呉総監、海上自衛隊幹部候補生学校長代理、海上自衛隊第一術科学校長代理、海上保安学

校長、呉市長、呉市議会議長等220名でした。

本慰霊祭の慰霊対象は天一号作戦で散華された戦艦大和の英霊と大和の護衛にあつた第二水雷戦隊矢矧・磯風・濱風・霞・朝霜・冬月・涼月及び雪風で散華された英霊、レイテ沖海戦で戦死された大和の乗組員、大和建造にあたり殉職された呉海軍工廠の工員の方々です。

二 所見

追悼式は、人々の心に残るであろう「次世代」に繋がる余韻を大いに感じさせる運びとなった。

今回、式典の中央部に飾られていたのは、美しくも悲しい「大量」の折り鶴であつた。

これは、新潟県在住の、中学を卒業したばかりの1人の男子生徒さんが折りあげた、戦艦大和の全乗組員の数に合わせた4千羽近い折り鶴であると伺つた。その生徒さんは中学での平和学習を経て戦艦大和について考えを深め、鎮魂と世界平和に願いを込めて一年半の日数をかけ、この鶴を折り続けたそうだ。

追悼式を通し、参列された全ての世代の方々、ひいては若い世代が、平和や戦争について自ら考える機会を持つことは、

昨今の世界情勢から見ても大切な事と思われる。

追悼式当日は快晴であつた。青い空の下、会場である呉の旧海軍墓地では桜が満開であつた。追悼式の催行を待っていたかのように花風が吹くと、会場は桜吹雪に包まれた。

(高松記)



献花する参列者 軍艦旗の左右に折り鶴

万世特攻慰霊碑第五十一回慰霊祭

評議員 宮本 雅史

令和四年四月十日(日)、鹿児島県南さつま市の万世特攻慰霊碑「よるずよに」前で、万世特攻慰霊碑第五十一回慰霊祭(万世特攻慰霊碑奉賛会主催)が行われた。

陸軍最後の特攻基地とされる万世飛行場からは、昭和二十年三月から四カ月の間に、十代の少年飛行兵を含む特攻振武隊百二十一人と第六十六戦隊七十二人、第五十五戦隊六人、ら計二百一人が沖繩の空へ飛び立つなどして散華した。

飛行場跡地の一角に建立されている慰霊碑「よるずよに」の前で行われる慰霊祭は、四十九回と五十回はコロナ渦で縮小して行われ、参列者も四十九回は十人、五十回は百五十人だったが、今年は、三十六人の遺族のほか一般参加を含め約二百人が参列した。

慰霊祭では、万世特攻慰霊碑奉賛会の本坊輝雄会長が、「今年二月にロシア・プーチン政権が、ウクライナに軍事侵攻し、ウクライナ国民の悲惨な状況がテレビ等で放映され、戦時下におけるウクライナ国民の悲痛な叫びとこどもをはじめとする多くの一般市民が犠牲になられて

ることに心の痛む日々であります」と、ロシアのウクライナ侵攻に触れ、「戦後七十七年のわが日本のために尊い命を捧げた皆様方の崇高な精神と使命感、歴史の真実を後世に語り継ぎ、平和社会を築くことは、私たちの責務であることを今、ここに改めてお誓い申し上げます」と、追悼の言葉に繋いだ。

続いて、第七十三振武隊として昭和二十年四月六日に散華した加覧幸男少尉の弟、優氏(八十六歳)が「あの大戦から七十七年の歳月が流れ、困難な道を通り越え、昭和、平成、令和となり、わが国は平和な国家として発展して参りました。これも散華された特攻隊員の大和魂を引き継いだ国民の証であると思います。我々日本人は、日本を愛し、平和な日本を築くことを願うばかりです」と慰霊の言葉を述べた。

旧隊員を代表して飛行第六十六戦隊の上野辰熊氏の「慰霊の詩」が事前に奉呈されたこと、また、新型コロナウイルスの感染拡大防止に配慮、予定されていた詩吟朗詠錦城会加世田道場による献詠『英霊南より還る』が事前奉呈されたことが報告された。

参列者全員による献花、陸上自衛隊国分駐屯地第十二普通科連隊の音楽隊十八

人による『国の鎮め』と『海行かば』の献奏に続き、南さつま市立坊津学園 中学三年の松元法香さんによる『若者の誓い』が読み上げられた。

『私の故郷には美しく広大な海が広がっています。幼いころから浜に打ち寄せる波の音、潮風の吹く町中の景色。私の側にはいつも海がありました。

私にとって広くて深い思い入れのある海を背景に、今から七十七年前、特攻隊員の若い命が遠い戦地の海へ旅立って行きました。

彼らの目には一体、どのような景色が写っていたのでしょうか。私は一年前、学校の平和学習の一環として、知覧の特攻平和会館に行きました。事前学習として、特攻をするに至った背景や隊員たちの手紙などに触れる時間はあったものの、実際に現地で感じた衝撃は今も鮮明に思い出せるほど、私の脳裏に焼き付いています。隊員たちの遺書や彼らの生涯を綴った文章など、胸が締め付けられるようなものを目にしていこうちに、違和感を覚えていた自分に気づきました。

数時間後に自分の死が定まっている隊員たちが皆、満面の笑みを浮かべているのです。なぜ、笑っているのだろうか。死ぬのが怖くないのだろうか。考えれば考

えるほど、私の中の違和感は膨れ上がるばかりでした。お国のために、と正義を貫き、自分自身の死が刻一刻と迫る恐怖は想像する事さえも憚られることと思えます。

平和について今一度、自分に問いかけてみたとき、それは、いつ壊れてしまうか分からぬ、はかなくもろいものです。今、私が当たり前のように学校に行き、当たり前のように友達と語り合い、当たり前のように家に帰る、当たり前のように眠りにつく。生活に溢れるそんな当たり前に対する考え方を見直してみる必要があると思えます。

戦後から七十年以上も時が経ちました。時が経てば経つほど、当時を経験した人は減り、平和や戦争に対する意識や記憶がおぼろげなものになります。

今、この時代に生きる私たちにできることは、一体、何なのでしょう。世界中で起きている貧困や戦争の解決に貢献するなど、大それたことはできなくても、これからの未来を作っていく私達には、戦争について後世に伝え、平和を尊び、守り続けていく使命があるはず。自分の命、他人の命、かけがいのない命を大切に、守り続けていくことをここに誓い、若者の誓いの言葉とします』

慰霊のことは捧げた加賀優氏は当時十歳。慰霊祭の後、「兄は戦闘機乗りにあこがれ、国のために自分から飛び込んでいったわけでしょうけど、かわいそうというだけではなくて、自分の信念、命をかけていったのかと思うと立派だったと思わざるを得ない」と兄に対する思いを語り、「参加することに意味がある。次の代につないでいかないといけない。ウクライナの問題は考えられないです。これだけ平和、平和と叫んでみても、現実はいくつかの状況でしょう。常識が通らない世の中になっている。ここ(万世)は平和の発信基地として発信していかなければならぬと思う。平和ほど尊いものはない」と慰霊祭を続け、語り続けることの大切さを力強く語った。

◇ 平成二十一年から、資料をもとに来館者に当時の様子や展示品の紹介を続け、慰霊祭に深く関わっている万世特攻平和祈念館の語りべで管理事務員の小屋敷茂さん(七十四歳)は、慰霊祭の後、慰霊に對する思いを熱く語った。

「若い人へ伝えたいことは？」
「若い人には、万世特攻平和祈念館に来るか。だから鬼になったような作戦もするんだと思います。世のご遺族は皆さん、何があっても戦争は反対だと言います」

「若い人へ伝えたいことは？」
「若い人には、万世特攻平和祈念館に来るか。だから鬼になったような作戦もするんだと思います。世のご遺族は皆さん、何があっても戦争は反対だと言います」

「慰霊祭と国を守ることは表裏一体と、考えないといけないと思います。平和、平和と、平和だけを唱えてもだめ。国を守るためにはどうするかを考えていかないといけない。どれだけの武力を持っていいのかは分かりません。だけど、国を守るために何をすべきなのか、どうあるべきなのか。今回のロシアのウクライナ

「言葉はきついかもしれませんが、戦争というのは人間は鬼になるんだ。人道的という言葉を使うが、戦争は勝つか負けるか。だから鬼になったような作戦もするんだと思います。世のご遺族は皆さん、何があっても戦争は反対だと言います」

「若い参列者も増えていると聞きますが、どうしてですか？」

「昨年、三年かかって、過去五十回の慰霊祭をまとめた五十年記念誌『特攻基地鎮魂の譜 よろずよに』をつくりました。ご遺族との絆を深めようと、ご遺族の本家だけでなく親族にも謹呈させて頂きました。若い人が多いのは、親に本を送ると、自分の孫に見せたりする。そうしていくと、小さい子供も関心を持つようになるのです。三歳のころから来ていた子供が今は小学校五、六年生になったという子供もいます。親の背中を見ている子供も多いのです」

「今後、具体的にはどのように広めていきますか？」

「イデオロギーは別にして、とにかく慰

霊をする気持ち強い職員がおれば、その施設は強くなっていくと思います。来年も、また、一冊の本を出しますが、それをご遺族に送らせて頂きます。そうすると途切れない。慰霊祭は、これからも続けて行きます」

会場内の参列者



本坊輝雄会長による追悼の言葉

松元法香さんによる『若者の誓い』



献花をする参列者

特別攻撃隊招魂祭・昭和の日記念祭式

評議員 宮本 雅史

令和四年四月三十日、小雨模様の中、秋田県秋田市川尻総社町の総社神社で、「特別攻撃隊招魂祭・昭和の日記念祭式」(秋田特別攻撃隊慰霊実行委員会主催)が行われ、地元地方議員を含む約三十五人が参列した。

同招魂祭は、平成四年四月二十九日、秋田県出身の陸海軍特別攻撃隊戦没者を祀る「特別攻撃隊忠魂之碑」の建立と共に始まり、今年で三十一回目。「忠魂碑」は、自身が第三特攻隊隊員だった榎谷建夫氏が私財を投じて建立したもので、裏面には、秋田県出身の五十六人の特攻隊員の氏名、階級、年齢、出身地が刻まれている。

招魂祭は、昭和天皇武蔵野御陵遥拝に始まり、国歌斉唱、「国の鎮め」のラッパ吹奏、黙禱に続き、神事斎行の後、雅楽の吹奏による神楽舞が奉納された。

追悼文朗読では、忠魂之碑に刻まれた五十六柱のうち六柱が同期の元芙蓉部隊、藤本光男氏の追悼文が代読され、藤本氏は追悼文の中で、「私が実戦配備された基地に後輩は一人もおりませんでした。日本海軍航空隊で最も若い搭乗員であり、

隊員たちは航空隊の一翼を担う集団でもありました。先輩搭乗員の多くはフィリピン戦線での戦死でありました。そのよ
うな中で沖繩戦が始まりました。すでに昭和十九年十月から沖繩に対する空爆は
始まっておりましたが、二十年一月そし
て二月には米軍の空を覆うような大編隊
での無差別空襲、南西諸島への艦砲射撃
など大殺戮戦が始まったのです。制空権、
制海権は米軍の手中にありました。迎え
撃つ日本の戦いは特攻戦でしかありませ
んでした。三月から四月にかけ全国各地
で訓練をうけていた航空兵達が九州南部
に集結、特攻隊員として沖繩の海に飛び
立ちました。四月十二日、高橋忠君たち
が艦爆撃星で特攻機百三機とともに散華
四月二十九日、零戦をかつて山本英司君
そして五月十一日、桑野正昭君と石橋憲
司君が攻撃機『天山』で僚機五十八機、
さらに陸軍特攻三十五機とともに体当た
り攻撃で散華されたのであります。ここ
『忠魂之碑』に名を留める五十六柱ご英
霊のうち、三十柱は沖繩戦での戦死であ
ります。九州鹿屋基地から海軍、陸軍は
知覧基地から、沖繩まで五百六十キロ、
二時間半、語る相手もなく群青の海を飛
び続けたのであります。何を思い、何を
語りたかったか、半世紀余もたった今で

もその鼓動が伝わってくるのであります
：山本君は角館の桜が自慢でした。『天
長節の頃の桜が一番良い』と言っていた
彼が、その天長節、四月二十九日、『ワ
レ敵空母二突入ス。一七、二一(五時二
十一分)』と打電、壮絶な戦死をとげた
のであります。十八歳、今の高校三年生
です。特別攻撃隊について今語る人はな
く、あの戦争さえ知らなかったという若
い人が増えております。第二次世界大戦
後も、朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東で
の戦争、多くの戦争、紛争はありました
が、今のわが日本は平和です。と、当
時の戦況や特攻隊員の心情を伝えた。
続いて招魂祭実行委員長 山本高敬氏
による大西瀧治郎海軍中将の遺書朗読、
玉ぐし拝礼、桑野正昭海軍少尉の遺書朗
読に続き、全員で「海ゆかば」を歌い上
げた。

以上



秋田総社神社

知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して
事務局長 石井光政

令和4年5月3日(火)に知覧特攻平和観音堂前にて、第68回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が斎行されました。ここ2年はコロナの影響で慰霊祭は中止されましたが、全国的に移動制限も解除され、本年はご遺族114名を含む約200名の参列で、限定された人数でしたが、厳粛に挙行されました。

式は、日本礼道小笠原流鹿兒島支部の方による献茶式から始まり、読経、焼香(知覧特攻慰霊顕彰会(塗木弘幸 南九州市市長)により、知覧から出撃した特攻隊員1036柱に対し「特攻戦没者の慰霊顕彰を、次の世代へと確実に引き継いでいくことを、令和の新たな御世を迎え、改めてお誓いいたします」との追悼の言葉に続き、遺族代表(渡邊 茂様・渡邊次雄少尉(第108振武隊 九七戦搭乗 昭和20年4月16日沖繩方面にて戦死))による慰霊の言葉が続きました。引き続き、詩吟朗詠錦城会による献詠3首(伊舎堂用久中佐、渡邊次雄少尉、坂内隆夫大尉)が詠じられ、慰霊電報の紹介、参列者全員による献花、陸上自衛隊音楽隊による献奏と慰霊演奏が行われ、

無事に終了しました。

まだコロナが完全に収束しない中、慰霊祭は限定された人数での斎行でしたが、知覧特攻平和会館には多くの観光客が訪れていました。会館の中では石垣島出身で献詠でも読まれた、伊舎堂中佐の特別

展も開催され、皆さん興味深く見学されていきました。

来年は例年通りの多くの参拝者が集まるための慰霊祭が挙行できることを願ってやみません。



知覧特攻平和観音堂



平和観音堂内の特攻像

特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

事務局長 石井光政

令和4年5月8日(日)に長崎県東彼杵郡川棚町新谷郷の「特攻殉国の碑」前にて、第56回特攻殉国の碑慰霊祭が挙行されました。

ここ2年間は新谷郷の役員の方だけの慰霊祭でしたが、今年はまだ人数が限定されたもの、ご遺族、ご来賓も含めて、訳120名の方が参列されました。

式は慰霊碑の広報に掲げられている軍艦旗への敬礼から始まり、国歌斉唱、亡くなられた英霊への黙祷、と続き、特攻殉国の碑保存会会長(寺井理治 新谷郷

総代)による慰霊の辞や慰霊電報の紹介、そして、全員による献花、と濟々と進められ、最後に同期の桜の合唱で締めくくられました。ご遺族の中には、お年寄りの手を小さなお孫さんが手を引いて献花をする姿もあり、ご英霊もさぞ喜ばれたものと思います。

他の慰霊祭と異なり、今回は、国歌の斉唱も、同期の桜の合唱も、マスクは着用していたものの、声を出して歌うことができ、参列者の気持ちも、英霊によく届いたのではと思われました。さらに、同期の桜の歌詞は「同じ兵学校の・・・」の所を「同じ新谷の・・・」と変更して歌われました。これは、昭和19年8月以降、



特攻殉国の碑



新装なった震洋展示館

震洋隊の訓練が開始されると、震洋隊の多くの建物が新谷郷地区に建てられたことに鑑み、慰霊碑も当初の場所から新谷郷地区に移設されたのをきっかけに、この碑をお守りし、慰霊祭を挙行し、面倒を見るのが新谷郷部落の仕事・天命と考えているとのこと。新谷郷の皆様

の心の籠ったご支援で慰霊祭が挙行されていることに、敬意を表する次第です。

令和4年度第10回「福岡県特攻勇士慰霊
顕彰祭」に参列して

理事 鮎田 英一

令和4年5月14日、福岡縣護国神社に
おいて第10回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭
が斎行された。

本慰霊顕彰祭は、平成24年の特攻勇士
之像建立以来、福岡特攻勇士慰霊顕彰会
の主催により、福岡縣護国神社の永代神



福岡縣護国神社



式典が行なわれた参集殿

楽祭として、毎年多くの方々が参集し、
厳粛かつ盛大に執り行われてきた。しか
し過去2回はコロナ禍という特殊事情に
より、参列者は限定され式典内容も規模
縮小を余儀なくされていた。

この日は、コロナ感染に収束の動きが
見え始めたことから、徹底した感染対策
のもと3年ぶりに、第10回の節目にふさ
わしく例年規模の式典が開催され、五月
晴れの陽を浴びる社内参集殿には、ご遺

族、来賓等、約130名が参列した。
第1部の祭典は、定刻の11時から国旗
敬礼、国歌斉唱のあと、英霊に対する黙
禱、神事として修祓の儀、降神の儀、献
饌の儀、田村豊彦宮司による祝詞へと続
いた。

次に、祭主・塚田征二会長から、
わが国は「自存自衛ノ為」開戦の止む
なきに至った大東亜戦争において、戦局
いよいよ不利の中、特攻隊が出撃するに
至り多大の戦果を挙げるも、戦い利あら
ずして、敗戦の憂き目を見るに至りまし
た。・・・特攻隊の方々は、十六歳から
十九歳という若さで、正に春秋に富む年
齢でありました。我が身を顧みずに海に
空に散華された特攻隊の方々に深甚なる
哀悼の意を表します。・・・わが国は戦
後未曾有の経済的發展を遂げ、国民は太
平の世を謳歌しております。・・・しか
しながら、国民の宗教心、道徳観、国を
守る気概は全く忘れ去られてしまいまし
た。・・・本年二月二十四日、ロシア軍
によるウクライナ侵略が始まったにもか
かわらず、国民の国防意識が高まったと
はとも思えず、特攻隊の方々が一命を
捨てて守ったわが国は、建国以来正に国
家累卵の危機にあります。しかしながら、
国会の動きは鈍く、国民も現在の危機的
状況を認識しているとは思えません。正



祭主による慰霊顕彰の辞

に嘆かわしい状況であります。しかし嘆いてばかりではいられません。・・・本日茲に参集された方々は、国を思い、国民の安寧を願う方ばかりであります。私達は特攻で散華された英霊に対し、この国を守り抜くことをお誓い申し上げます。皆様の功績を称え、慰霊の誠を尽くし、未来永劫、慰霊祭を行うことをお誓

い申し上げます。

この後、宮司、ご遺族、来賓による玉串奉奠へと進み、最後に撤饌の儀、昇神の儀により神事は滞りなく終了した。

第2部の式典では始めに、昭和二十年四月十六日、和気八幡護皇隊第四小隊長として、第二国分基地を出撃、南西諸島

洋上にて二十一歳で戦死された、渡辺政則・海軍大尉（福岡県出身、九州専門学校、第13期飛行科予備学生）の遺書が奉

読された。

次いで、博多券番の芸妓衆による舞が奉納された後、ご遺族代表として宮田信之様のご挨拶をされた。宮田様は、昭和20年4月15日、沖縄で航空機不時着後、米軍との銃撃戦で戦死された御父上の兒玉正美・陸軍大尉（陸士56期）の最新のご様子を語られるとともに、英霊のお蔭で今の日本が平和を享受できていること、ウクライナでの戦争の現実をみたときに日本の防衛力強化が必要であることなどを切々と訴えられた。

最後に、参列者総員による「同期の桜」奉唱、トランペットによる「海ゆかば」吹奏と続き、式典は盛大かつ厳正のうち幕を閉じた。

本顕彰慰霊祭の特徴は、多くの志ある

方々の賛同協力を得て、特攻隊員のご遺族はもとより、地域から多彩な方々が参列していることである。今回も、遠賀郡岡垣町の久間武春・高倉神社宮司、福津市の川野萬里子・東郷神社宮司、福岡県の偕行会、水交会、海友会、郷友連盟、つばさ会、日本会議の各代表者、また現役自衛官として航空自衛隊春日基地司令・田崎剛広将補、西空方面隊司令部総務部長・玉越香苗1佐が参列されている。

さらに代理も含めて地元国会議員、地方議員も多数出席され、中には公務ご多忙の折にもかかわらず現役の防衛副大臣・鬼木誠衆議院議員も参列されていた。

また台湾から、陳銘俊・福岡駐在総領事も参列され哀悼の誠を捧げられていた。日本統治下の台湾からは数多くの特攻機が出撃し、フィリピン・レイテ決戦における薫空挺隊のように台湾出身者を主力とする特攻作戦も敢行されているが、今日ではその史実は残念ながら余り知られていない。陳総領事が、慰霊祭後の直会の場において参列者に対し、日台の歴史の深い絆やその将来に関して熱い思いを吐露されていたのには感銘を覚えた。

福岡特攻勇士慰霊顕彰会は、この日も元気なお姿を見せた初代会長・陸士57期出身の菅原道之氏のと、現在は第2代会長・塚田征二氏（株裕生堂代表取締役

会長)にしっかりと受け継がれている。本慰霊顕彰祭は、福岡縣護国神社と福岡特攻勇士慰霊顕彰会の緊密な連携のもと、若い世代を含む地元有志や諸団体の誠意と献身により成り立っており、今後とも末永く肅々と斎行されていくことを祈念してやまない。



参集殿内の様子



あゝ特攻勇士の像

千葉縣護國神社特攻勇士之像慰靈祭

評議員 及川 昌彦

令和4年5月26日(木) 11時より千葉縣護國神社境内の特攻勇士之像前にて、千葉県出身者特攻隊員の慰靈祭が斎行されました。

創立百四十五周年記念事業として今年二月に移転した初めての慰靈祭となりました。

慰靈祭は11時から取り行われました。金子編集長が顕彰会の代表として玉串奉奠をしました。

参列者は、千葉県偕行社、東葛偕行社、下総水交會、千葉県郷友會、隊友會等、約20名でした

慰靈祭後、新しい社殿にて竹中啓悟宮司より力強い挨拶がありました。

本慰靈祭は来年以降も毎年5月26日11時から斎行されます。

ご案内が無くても参列できますので、周辺の会員にも告知して多くの参列を呼びかけたいと思えました。



千葉県特攻勇士之像

顕彰譜 (7)

会報134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第七回目です。

海軍航空

土浦海軍航空隊

予科練之碑



所在地 茨城県稲敷郡阿見町
陸上自衛隊武器学校内
建立 昭和41年5月27日
問合せ先 東京都品川区南大井六-1-6-112
(公財) 海原会 (〇三-三七六八-三三五二)
写真提供 (公財) 海原会



向って左は高松宮妃殿下御歌の碑

由来記

海軍の飛行予科練習生制度は昭和5年に創設され、航空軍備拡充のため年を追って採用人員が増大し、昭和12年には甲種予科練が加わり、練成基地も横須賀から昭和14年霞ヶ浦に移り、昭和15年11月予科練教育専門の土浦空に落ち着いた。

その後終戦迄の間全国に十八の練習航空隊が増設され、基礎教育を受けた練習生は次の課程へと巣立っていった。その数実に二十五万人に及ぶ。

これら予科練出身者は昭和12年支那事変の渡洋爆撃を皮切りに、大東亜戦争においては海軍航空戦力の中核となって勇戦敢闘、特に昭和19年特攻作戦が開始されるや、その主力となって、航空、水中、水上の各特攻を敢行、実に卒業生の八割が国に殉じて若い命を捧げた。

昭和41年になって予科練出身生存者の手により土浦空跡地の一角に雄飛園が造成され、その中に予科練のブロンズ像(堤達男氏作)を上置き予科練之碑が建立され、さらに若鷺の歌の碑と高松宮妃殿下御歌の碑が併置されている。

慰霊祭は毎年海原会によって執り行われている。

海軍航空

各地予科練の碑



浦戸海軍航空隊 (甲飛 14、15、16期) 高知市



第2鹿屋航空隊 (第22期乙種飛行予科練生) 鹿屋市



貴様と俺の碑 (鹿児島海軍航空隊) 鹿児島市



若櫻の碑 (三重海軍航空隊) 津市

海軍航空

1 桜花の碑（神雷戦士之塔）



1 鎌倉建長寺桜花乃碑



写真提供 湘南水交会

桜花はロケット推進の人間操縦滑空爆弾（総重量二・二四噸、爆薬一・二噸）であり、これを一式陸上攻撃機により吊り上げて敵空母に体当たり攻撃を挑むものである。

昭和19年10月神雷部隊として七二一空が神ノ池基地に編成され訓練を開始した。

昭和20年3月21日本土南方海面の米機動部隊（空母6隻）に対し、神雷部隊は桜花15、陸攻18、零戦10をもって出撃したが、敵戦闘機の迎撃を受け、到達前に全滅の悲運に遭った。以後天一号航空決戦の間桜花攻撃に出撃すること10回に及ぶ一方、爆戦特攻隊建武隊を編成し、その出撃11回を数え、隊員470名余が多大な戦果を挙げて散華した。

昭和40年3月生存有志が遺族・関係者とはかり、神雷部隊戦友会（会長岩城邦宏氏）を結成、第一回桜花出撃の二十周年をトして鎌倉市建長寺内に神雷部隊の慰霊碑を建立し、隊長野中五郎少佐以下英霊の名を留めて慰霊顕彰してきた。

海軍航空



2 鹿屋市野里桜花別盃之地碑

3 2
桜花別盃之地碑
桜花練成之地碑



当時宿舎に使った野里国民小学校の跡に建立

このほか昭和53年12月には茨城県神栖町神ノ池の基地跡に桜花練成之地碑（山岡莊八氏揮毫）が、また出撃の鹿屋基地には鹿屋市野里に桜花別盃之地碑（山岡莊八氏揮毫）が、ともに元桜花隊員小城久作氏夫妻の力により建立されている。

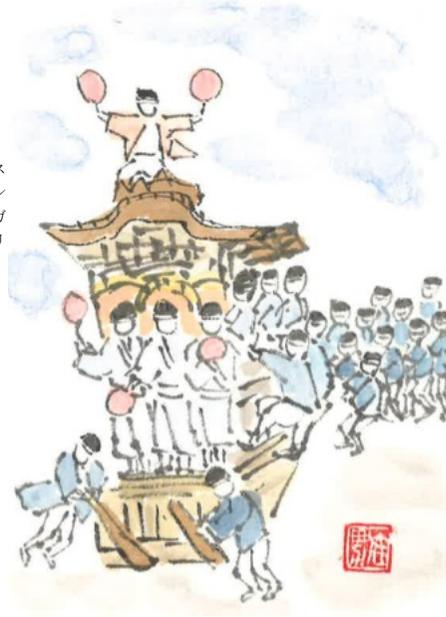


3 桜花練成之地碑

- 所在地 1、神奈川県鎌倉市建長寺塔頭正統院
2、鹿児島県鹿屋市野里町
3、茨城県神栖市神ノ池基地跡
- 建立 1、昭和40年3月21日
2、昭和53年12月吉日
3、昭和53年12月

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● ハルピンの松花江スンガリのほとり訪ね来て

透き徹る水流し雛を置く

● 寝つかれぬ身体を窓辺もたせつつ

回想に酔ふハルピンの夜

● 生きて仰ぐ一縷いちちるのあかり流れ星

● 朝寒や骨箱胸の少年こせの一人

松花江

● 青空に 雲跡残し 君が征く

● 螢火に おかえりなさいと 声をかけ

淳



● アツチツチ マスクの下は 熱中症

● このお腹 なってほしいな 夏痩せに

ねこ

事務局からの連絡事項

一 第71回特攻平和観音年次法要の縮小
齋行について

来る9月23日(金・祝)に世田谷山観音寺において齋行予定の、第71回特攻平和観音年次法要につきましては、いまだ新型コロナウイルス感染症が終息せず、特に首都圏においては3密の回避等、引き続き感染防止への配慮が必要な事から、規模を縮小し、今年度はご遺族、ご来賓のみへのご案内として実施する事とし、一般の方の参列はお控えいただきますようお願い申し上げます。

皆様には、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。来年は今のままの分まで盛大に齋行できますこと、皆様のご健康ご多幸をお祈り申し上げます。

なお、年次法要にお布施をお寄せいただきました方は、御芳名と共に世田谷山観音寺に奉納させて頂きますので、同封の「郵便払込取扱票」によりお払込みください。(一名分、三千元)

二 「靖國カレンダー」の斡旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。

す。同封のチラシのとおり、来年のカレンダーはリニューアルしたものとなっております。ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額(送料込み)を記載して申し込んでください。ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

三 住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「〇〇様方」まで必要となりますので、電話やメール或は、払込取扱票の空欄に記入して頂くなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

寄付者御芳名(敬称略)

(令和4年4月1日～6月30日)

(単位千円)

一〇〇 呉 奈々子

一〇 末次 優一

一〇 浮世 喜昭

一〇 戦歿学徒慰霊祭実行委員会

七 吉田 和貞

七 高須 と志江

七 岡本 貞雄

七 酒井 陽太

七 松川 徹男

六 森園 安男

四 小山 哲

三 奥村 仁則

二 林 英夫

二 川井 孝輔

二 羽瀨 徹也

二 細谷 清

二 吉満 正広

二 天野 文恵

二 坂下 淳子

一 早瀬 登

新入会員名簿(敬称略)

(令和4年4月1日～6月30日)

北海道 土持 大輔

東京 小川 楊司

堀田 勇三

東京 二瓶 文隆
 広島 小林 章彦
 福岡 岡本 貞雄
 沖縄 中野 太一
 松田 清明
 (株)カーネル・レンタ沖縄

会員訃報 (敬称略)

千葉 後藤 英夫 (2・11・1)
 黒瀬 純造 (4・1・18)
 東京 黒瀬 純造 (4・1・18)
 滝波 登 (4・2・13)
 森園 安男 (4・2・14)
 神奈川 米 正七 (4・3・24)
 静岡 井出 隆夫 (4・3・24)
 福岡 内田 雄一郎 (3・12・2)
 木梨 憲治 (4)

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。
〒102-0007
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7
東専堂ビル2階
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電話 03-5221-3459
FAX 03-5221-3459
E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp